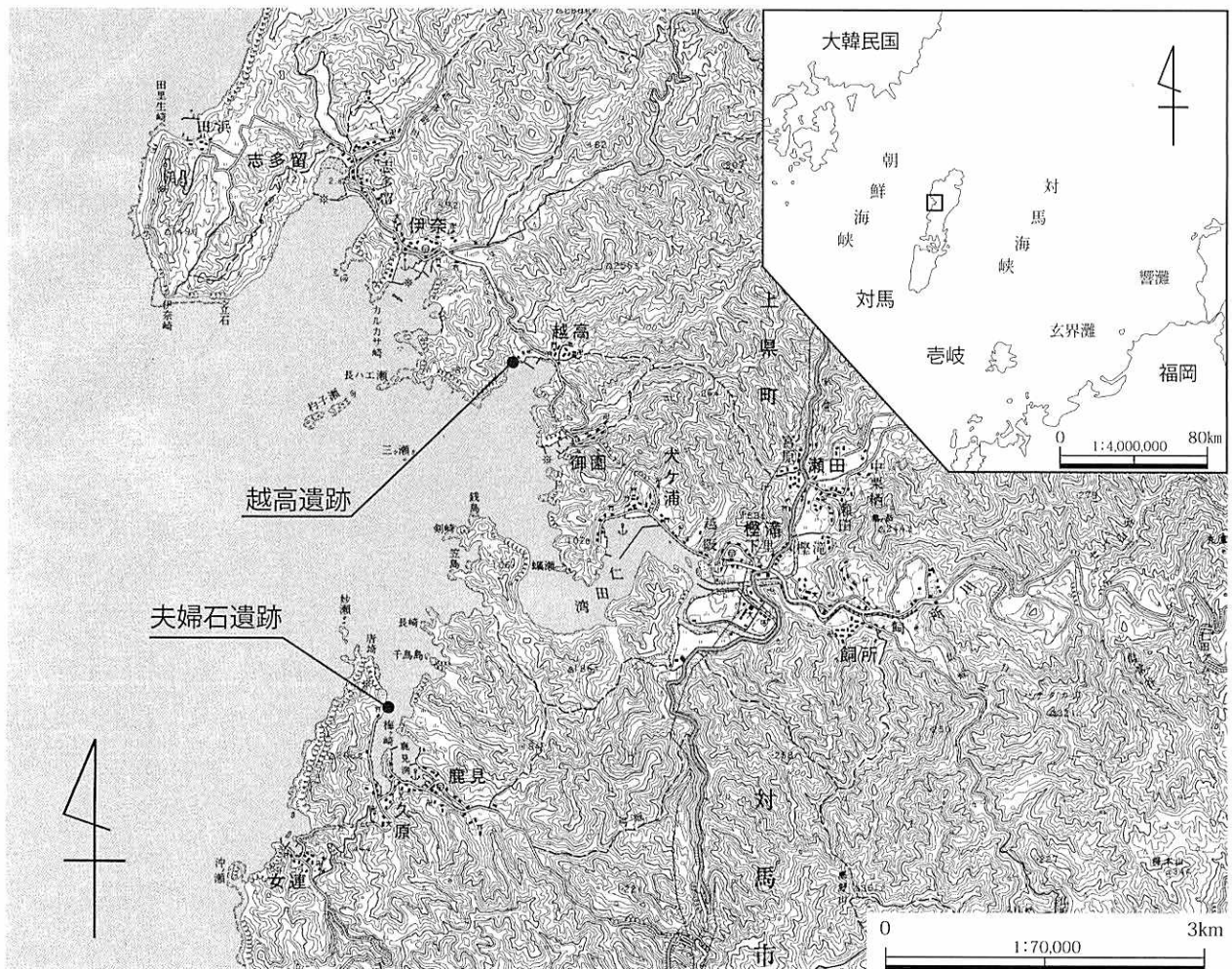


一 位置と環境

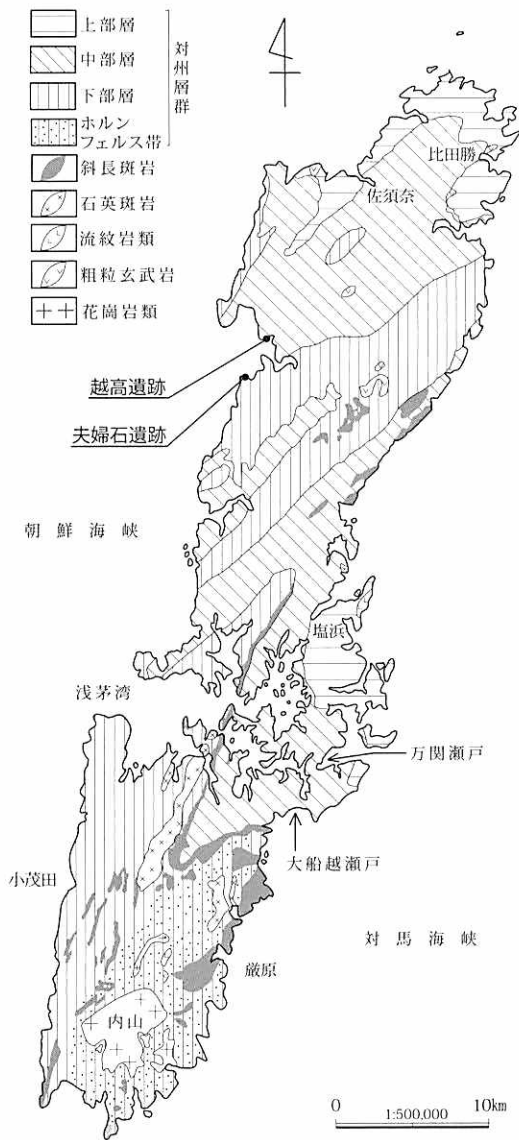
1. 地理的環境

対馬の位置と地形 対馬は、九州の北西部に位置する長崎県の離島である。北緯 34 度 42 分～34 度 5 分、東経 129 度 30 分～129 度 10 分であり、大阪～和歌山間と同緯度にあたる。南北約 82 km、東西約 18 km と南北に長い島で、面積は 708.51 km² である。離島の面積としては、新潟県佐渡島、鹿児島県奄美大島に次ぐ第 3 位の規模を誇る。対馬の東側は対馬海峡、西側は朝鮮海峡に面している。朝鮮半島とは約 50 km 離れており、快晴時には釜山市街を視認することができる。こうした位置関係から、「国境の島」とも呼ばれている。

対馬は本来一つの島であったが、現在は中央部の浅茅湾と三浦湾を結ぶ人口運河の万閑瀬戸・大船越瀬戸によって分断されている。浅茅湾を境に北は上島（上県）、南は下島（下県）とも呼ばれる。上島には、傾斜の急な標高 400 m 以下の山々が連なり、中央部の浅茅湾周辺になると、標高 100～200 m と地勢は低くなる。これに対して、下島には傾斜の緩やかな標高 400～600 m の山が多く、対馬最高峰の矢立山（標高 648.5 m）も存在する。分水界は東に偏るため、東海岸側には短い河川が多く、沖積地はほとんど形成されない。一方西海岸側には長い河川が多いものの、増水により土砂が



第 1 図 調査遺跡の位置



第2図 対馬の地質図 (高橋 1992 を一部改変)

た。この際、対馬-五島構造線が右横ずれ断層および衝上断層として活動し、対馬の隆起を引き起こした。現在、対馬は五島列島や九州北西部と同じ大陸棚でユーラシア大陸とつながっている。

対馬の基本構成岩石は、古第三紀(約6500万年前)から新第三紀中新世前期(約2200万年前)にかけて生成された海成層の堆積岩である。これは対馬層群と呼ばれ、泥岩、砂岩・泥岩互層を主として砂岩、礫質砂岩・礫岩、火山砕屑岩から構成されており、堆積層の厚さは約6000m以上にもなる(第2図)。対馬層群は上部層・中部層・下部層・ホルンフェルス帯に分けられる。上部層は上島の北端部と南東部、中部層は上島の大部分、下島の北東部、下部層は上島の中央部と南部、下島の西部にそれぞれ分布している。ホルンフェルス帯は、下島の下部層に花崗岩が貫入することにより生成された堆積岩帯であり、下島南部に分布している。花崗岩の他にも斜長斑岩、石英斑岩、粗粒玄武岩といった火成岩類の貫入がみられる。これらの火成岩類は下島に多く貫入しており、その影響から下島には標高の高い山々が多い。なお、今回調査した越高遺跡は対馬層群中部層、夫婦石遺跡は対馬層群下部層にあたる。特に越高遺跡では、堆積層中に対馬層群の風化により生じたと考えられる細長い小礫が多量に含まれている。(稗田)

すぐに堆積し、河口の低地の発達を妨げることから、沖積地はわずかである。海岸は、リアス式海岸と断層海岸の二つに分けられる。リアス式海岸は、上島北部の豊付近一带や浅茅湾が代表的である。断層海岸は、地表に露出した断層面からなる海岸のことで、上島東部の舟志から佐賀一带や下島南部の御崎から豆殿崎一带が顕著である。

今回発掘調査を実施した遺跡は、越高遺跡と夫婦石遺跡である(第1図)。これらの遺跡は、ともに上島西海岸の大きく開いた湾に位置し、縄文時代における朝鮮半島南部との関わりを示す遺物が出土する遺跡として著名である。

越高遺跡は、対馬市上県町越高に所在し、越高集落に面した湾の西側に立地する。遺跡はA・B二つの地点から構成される。A地点は標高3~8m地点に位置し、B地点はA地点から北東に約60m離れた、標高4~8m地点に位置する。遺物包含層が崖面に露出しており、風雨や波の侵食を受けて破壊されつつある。

夫婦石遺跡は、対馬市上県町久原に所在し、鹿見湾の西側丘陵の東側裾部に立地する。遺跡は八幡神社境内付近一带から海岸にかけての標高0~4mに位置する。

対馬の成り立ちと地質 対馬島の形成は約1700万年前~約1400万年前までさかのぼる。この時期に日本列島は大陸から分断され、弧状列島となった

2. 歴史的環境

(1) 対馬の原始・古代 (第3図、第1・2表)

縄文時代 対馬においては、現在まで旧石器時代の遺跡は発見されておらず、人々の生活の痕跡は縄文時代より認められる。縄文時代の遺跡の多くは西海岸に分布しており、大きな河川流域ではなく、小さな湾奥の岩礁性海岸近くの平坦地に立地するのが特徴である。

縄文時代早期末から前期にかけての代表的な遺跡は、今回調査対象とした上県町越高に所在する越高遺跡である。過去の調査では塞ノ神式や轟B式、曾畑式といった縄文土器のほか、朝鮮半島系の隆起文土器が出土したとされている。また、出土した石器の一部には佐賀県腰岳産と思われる黒曜石が用いられている。遺構は土壌墓2基、炉跡が3基検出されている。隆起文土器が出土することから、縄文時代の早い段階から朝鮮半島南部との交流を示す遺跡として評価されている。

縄文時代前期から中期にかけての遺跡としては、上県町久原に所在する夫婦石遺跡があげられる。本遺跡も今回の調査対象とした遺跡で、過去の調査では曾畑Ⅱ式や阿高式などの縄文土器、水佳里Ⅰ式・水佳里Ⅱ式などの朝鮮半島系の櫛目文土器が出土している。石器としては石鏃・石斧などがみられる。縄文土器は少量で、朝鮮半島南部系の櫛目文土器が多量に出土するのが特徴である。

縄文時代中期から後期にかけての代表的な遺跡としては、峰町古河に所在する吉田遺跡があげられる。吉田遺跡では阿高式や南福寺式といった縄文土器、朝鮮半島系の二重口縁土器に加えて、打製石斧や打製石鏃などの石器が出土している。土壌のプラントオパール分析から、遺跡周囲には照葉樹林が広がっていたと考えられ、堅果類を主な食料としていたと推測されている。また同時期の遺跡として峰町佐賀の佐賀貝塚がある。本貝塚は東海岸に位置する数少ない縄文遺跡の一つである。阿高式や北久根山式などの縄文土器と共に、朝鮮半島系の短斜線文土器が出土している。住居跡が3基確認され、その中の1基から30点以上の石斧や砥石が出土していることから、石斧製作工房と想定されている。また、東海岸に位置すること、壱岐産と腰岳産の黒曜石が検出されたことから、壱岐島を介した九州本島との交流拠点であったと考えられている。

縄文時代後期の遺跡としては、上県町志多留に所在する志多留貝塚がある。鐘崎式や北久根山式などの縄文土器とともに、石錘や打製石斧などの石器、猪牙製の銚といった骨角器が出土している。埋葬人骨も多数検出されている。他の遺跡と比べ、石器や骨角器の形態が北部九州のものと同通しているという特徴がある。

各遺跡から出土した遺物をみると、縄文時代の対馬は、縄文時代早期末から中期にかけて朝鮮半島南部との交流が盛んであったと考えられる。しかし、それ以降は朝鮮半島系の遺物の出土量が減少するため、交流の低調化が指摘されている (古澤 2014)。 (新垣)

弥生時代 対馬の弥生時代の遺跡は、対馬中央部の浅茅湾周辺に集中しており、佐護・三根・仁位・佐保を中心に約190箇所が確認されている。

弥生時代前期の遺跡は他の時期に比べると少ない。代表的な遺跡としては峰町三根に所在する井手遺跡があげられる。板付式や亀ノ甲式、城ノ越式といった弥生土器のほかに朝鮮半島系の孔列文土器や挟入石斧が出土していることから、朝鮮半島南岸地域との交流が指摘されている。

弥生時代中期になると、遺跡数は大幅に増加し、その多くは箱式石棺を主体とする埋葬遺跡である。豊玉町仁位に所在するハロウ遺跡は、浅茅湾に突出した岬の先端に立地しており、弥生時代中期から終末期にかけての箱式石棺7基が検出されている。A地点第5号箱式石棺墓とB地点第2号箱式石棺

墓から小形仿製鏡や広形銅矛が出土していることから、北部九州との交流が指摘されている。

弥生時代後期においても遺跡の主体は箱式石棺墓群である。上対馬町古里に所在する塔の首遺跡は、箱式石棺5基からなる石棺墓群である。3号石棺の副葬品にみられるように、朝鮮半島系土器や銅釧などの朝鮮半島系の遺物と広形銅矛や弥生土器といった北九州系の遺物が共伴する点が大きな特徴である。また、当時期には埋納遺構も多くみられ、豊玉町佐保に所在するシゲノダン遺跡では把頭飾や馬鐸、中広銅戈など多数の青銅器が一括して埋納されていた。このように浅茅湾周辺に多くの箱式石棺墓が立地することから、浅茅湾を中心に朝鮮半島や北部九州と交流していたことが想定される。

対馬の弥生時代における稲作は、水田関連遺構や石包丁などの農耕に関する遺物の出土がほとんどみられないため、実態は明らかではない。また、弥生時代における集落跡もほとんど見つかっていないのが現状である。

(古賀)

古墳時代 対馬の古墳時代において、首長墓と推定される古墳は下島東岸地域の美津島町^{けち}難知周辺に多く築造されている。

古墳時代前期の古墳としては、上県町志多留に所在する大將軍山古墳があげられる。墳丘は残存していないが、長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.6mの石棺を主体部としている。副葬品としては、^{きほう}夔鳳鏡・土師器・陶質土器・鉄鏃・玉類が出土している。出土遺物から、4世紀後半の築造と推定されている。

古墳時代中期の古墳としては、美津島町難知に所在する^{でいづか}出居塚古墳があげられる。全長40mの前方後方墳で、埋葬施設は長さ4m、幅2mの竪穴式石室である。出土した柳葉式銅鏃から、4世紀後半から5世紀初頭の築造と推定されている。

古墳時代後期においても、同地域に首長墓級の根曾古墳群が築造されている。これらは、5～6世紀にかけて継続して築造された古墳群であり、6基の古墳が確認されている。1号墳は全長約30mの前方後円墳で横穴式石室を主体部にもつ。2号墳も同様に全長約36mの前方後円墳で、主体部は横穴式石室である。3号墳も横穴式石室を主体部にもつが墳丘は残っていない。石室の形態より、1号墳は5世紀代、2号墳と3号墳は6世紀後半の築造と推定されている。

古墳時代終末期の古墳としては、巖原町下原に所在する矢立山古墳群があげられる。3基の古墳が確認されており、いずれも方墳で、主体部は横穴式石室である。なかでも2号墳は、石室の平面がT字形を呈しており特徴的である。遺物としては、金銅製刀飾・環座金具・銅銚・鉄刀などが出土しているが、その大半は7世紀代の須恵器であり、いずれの古墳も同時期の築造と推定されている。

古墳以外の墓制に関しては、その大部分が弥生時代から古墳時代まで続く箱式石棺墓であり、先述したハロウ遺跡においても、古墳時代の箱式石棺が検出されている。また、集落跡に関しては、弥生時代と同様にほとんど見つかっておらず、その様相は不明なままである。

(古賀)

古代以降 対馬は古代以降、対外交流の要衝としての役割を担ってきた。663年の白村江の戦い後、対馬には本土防衛のために防人が配置され、667年に金田城が築造された。金田城は美津島町黒瀬に所在し、浅茅湾に面する城山の中腹に立地する朝鮮式山城である。1993年より14次に亘る調査が行われ、門礎石・城戸・水門跡などが発見されている。

平安時代に編纂された『和名抄』によると、律令国家体制下の対馬には、国府・国分寺の役割を果たした島府・島分寺がそれぞれ設置されたと記載されている。所在地は巖原町が候補と考えられているが、それを証明する遺跡は発見されていない。また、対馬と大陸の間で衝突が発生することもあり、1019年に女真族が対馬に侵攻した際は、多大な被害を受けた。

対馬では平安時代から鎌倉時代初期まで豪族の阿比留氏が権力を握っていた。しかし、1246年に

宗氏が上陸すると阿比留氏を退け、対馬を統治した。その後対馬は、1274年、1281年に蒙古軍の攻撃（元寇）によって壊滅的な被害を受けた。しかし元寇が終結すると日元貿易が盛んになり、対馬はその寄港地となった。この時期の遺跡としては、大石原遺跡がある。大石原遺跡は上県町佐護に所在する中世集落跡であり、掘立柱建物跡が検出されたほか、高麗製陶器、北宋製陶器などが出土した。輸入陶器が日常的に使用された可能性が考えられる遺跡である。

南北朝・室町時代になると、倭寇が活発になり、対馬は朝鮮の依頼を受け倭寇の鎮静化を図ったが、1419年に倭寇の本拠地とみなされ朝鮮から攻撃を受ける事態が発生した（応永の外寇）。倭寇の中には朝鮮や中国などと交易を行っていた者もあり、その一人である^{そうだ}早田氏の拠点と考えられている遺跡が美津島町尾崎に所在する水崎遺跡である。発掘調査によって中国製、朝鮮製、タイ・ベトナム製などアジア各地の陶磁器が出土しており、早田氏がアジアの広範囲で交易を行っていたことが明らかになっている。その後、対馬を統治する宗氏は朝鮮との交易権を握り、15世紀には対馬の役人を朝鮮に派遣して日本人の貿易拠点として倭館を設置するなど貿易体制を整備した。（佐々木）

（2）遺跡立地の変遷

対馬の遺跡立地は、地理的特性と大きく関わっている。対馬は全国の離島のなかでも3番目の面積を誇るが、険しい山地が南北に連なり、海岸線付近まで山地が迫っているため、集落は海岸部の狭小な平地に限られている。このことから、対馬の遺跡の多くは海岸部に立地する。

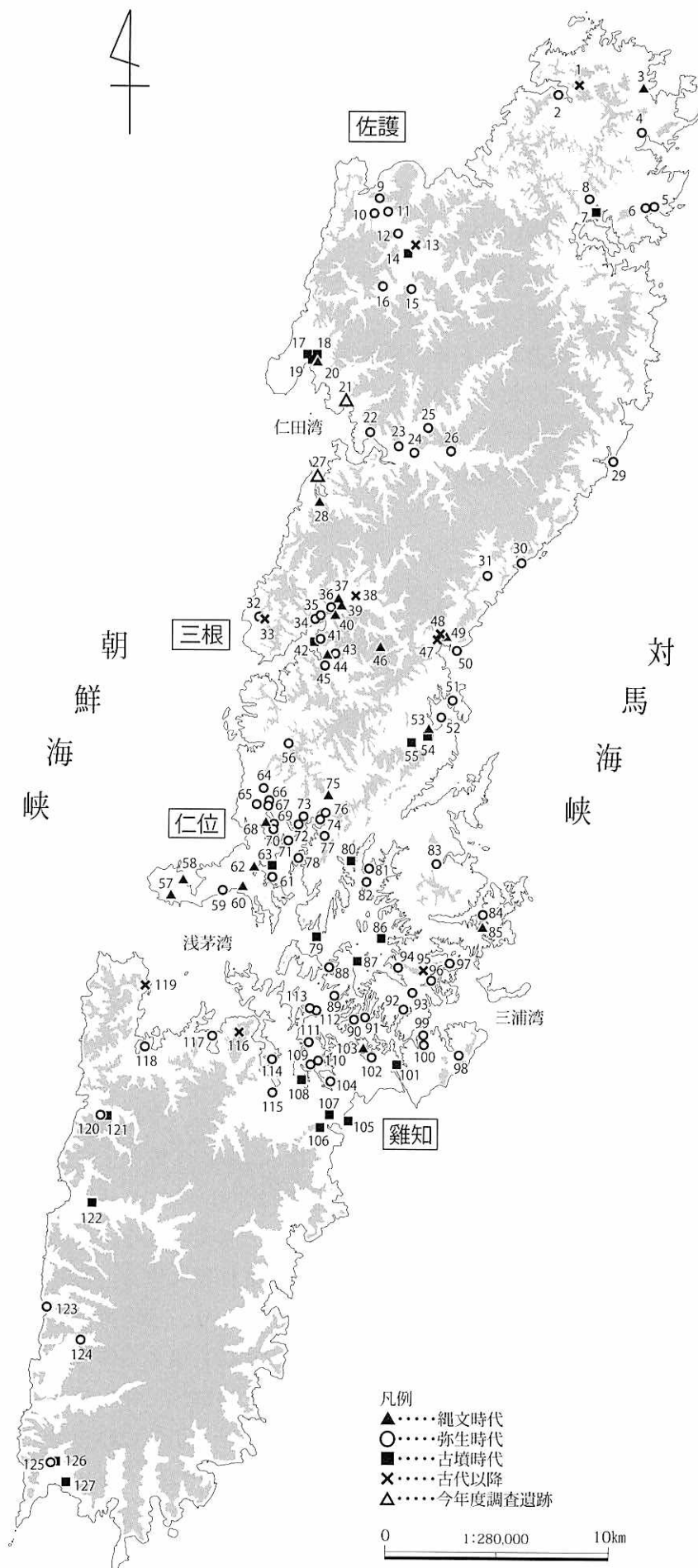
縄文時代は遺跡数が少ないため、時期ごとに遺跡立地の変遷を読み取ることは困難である。しかし西海岸を中心に分布する傾向にあり、東海岸にはほとんど分布しない。この要因として、前述したように人々が生活できる平地が少なく、特に東海岸でその傾向が顕著であることがあげられる。

弥生時代の遺跡は埋葬遺跡や埋納遺跡がほとんどであり、その多くは海に向かって突出した岬の先端部あるいは海を臨む丘陵上につくられている。弥生時代前期から中期前半の遺跡は数が少なく、地域的な変遷はつかみにくい。しかし、弥生時代中期後半から後期前半には青銅器を副葬した埋葬遺跡が多数みられるようになり、これらの遺跡は上島西海岸に面する峰町三根および浅茅湾に面する豊玉町佐保・仁位に集中している。特に、三根から検出された石棺数は多く、タカマツノダン遺跡・サカドウ遺跡など、九州北部や朝鮮半島の青銅器が種類・量ともに豊富に出土する遺跡も存在することから、三根は当時の中心地域であったと考えられる。

弥生時代後期後半から終末期に入ると遺跡分布に変化が生じる。中期後半の中心地と考えられる三根では埋葬遺跡が減少し、豊富な副葬品もみられなくなる。一方で佐保・仁位周辺においても副葬品の種類・量は減少傾向を示すが、同地域で出土した銅矛は30口におよぶ。この数は他地域と比べて多く、対馬の中心地域が三根から佐保浦・仁位へ移動したと考えられる。また、上島北部に位置する塔の首遺跡や下島南部の久根田舎遺跡など、遺跡分布が南北に拡大する。特に浅茅湾南岸では青銅器を副葬する埋葬遺跡が現れ、なかでも美津島町雞知で顕著となり、古墳時代へと継続する。

古墳時代の集落例は少なく判然としないが、中心地は出居塚古墳や根曾古墳群といった首長墓が継続して築造されている美津島町雞知と考えられる。これらの遺跡は、弥生時代後期後半の勢力が古墳時代においても継続して力を持ち、強力な首長を輩出したことを示している。

対馬の中心地は弥生時代以降、時期を追うごとに三根、佐保・仁位、雞知と南下した。古代になると対馬には島府・島分寺が設置されるが、所在地は下島東岸の巖原に推定されている。以降、現代まで巖原が対馬の中心地として機能している。（佐々木）



第3図 対馬の主要遺跡分布図

第1表 対馬の主要遺跡地名表(1)

No.	遺跡名	住所	時代	種類	立地	備考	文献
1	撃方山城跡	上対馬町豊字山井寺	中世	城跡	山頂		18
2	経限遺跡	上対馬町河内字藤内ヶ内	弥生	埋葬遺跡	丘陵	石棺3基	4, 5
3	泉遺跡	上対馬町豊字在所	縄文・弥生	遺物包含地	丘陵	箱式石棺	22
4	塔の首遺跡	上対馬町古里字在所陽	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺5基	4, 17
5	コフノ際遺跡	上対馬町唐舟志字コフノ際	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺9基、3基大破	20
6	津和浜遺跡	上対馬町唐舟志字コフノ際	弥生	銅矛出土地	平地		4
7	朝日山遺跡	上対馬町大増字大名隈	古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺4基	25
8	浜久須遺跡	上対馬町浜久須字下モ原陽	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	石棺	18
9	樋原遺跡	上県町樋原字北里	弥生	銅矛出土地	台地		18
10	ハカタンクマ遺跡	上県町佐護字カシヲ西里	弥生	銅矛出土地	丘陵		18
11	クビル遺跡	上県町佐護字ゴンクマ字北里	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺	4, 25
12	白岳遺跡	上県町佐護白岳字南里	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺	4
13	大石原遺跡	上県町佐護字大石原	中世	遺物包含地	平地	掘立建物跡、土坑	13
14	鵜浮遺跡	上県町佐護鵜浮字南里	古墳	埋葬遺跡	台地	積石遺構1基	18
15	ヘボノダン遺跡	上県町佐護ヘボノ字東里	弥生	埋葬遺跡	丘陵		18
16	八幡ダン石棺墓	上県町佐護田嶋字南里	弥生	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺	4, 25
17	大將軍山古墳	上県町志多留大將軍山	古墳	古墳	丘陵		2
18	千人塚古墳	上県町志多留字茂ヶ	古墳	古墳	平地		18
19	万人塚古墳	上県町志多留字向平	古墳	古墳	平地		25
20	志多留貝塚	上県町志多留字茂ヶ	縄文・弥生	貝塚	平地		5, 22, 25
21	越高遺跡	上県町越高字ハヤコ	縄文	遺物包含地	海岸	土壇墓2基、炉跡3基	6, 7, 19, 22
22	鉾山遺跡	上県町犬ヶ浦字鉾山	弥生	銅矛出土地	丘陵		25
23	槻の内遺跡	上県町樫籠字中川	弥生	銅矛出土地	丘陵	墳墓	25
24	エイタイノ壇遺跡	上県町樫籠仁田エイタイノ壇	弥生	埋葬遺跡	台地	箱式石棺1基	18
25	亀の隙遺跡	上県町中栗字亀の隙	弥生	銅矛出土地	丘陵		18
26	鉾淵遺跡	上県町鉾所字大曲	弥生	銅矛出土地	丘陵		25
27	夫婦山遺跡	上県町久原字夫婦石	縄文・弥生・古墳	遺物包含地	海岸		8, 9, 10, 22
28	向際遺跡	上県町久原字向際	縄文	遺物包含地	平地		22
29	剣島遺跡	上対馬町芦見字尾崎	弥生・古墳・中世	埋葬遺跡	小島	石棺	25
30	椎ノ浦遺跡	峰町志多賀字椎ノ浦	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺5基、壺棺2基	4, 17
31	島前遺跡	峰町志多賀字島前	弥生	埋葬遺跡	丘陵	石棺	18
32	木坂遺跡	峰町木坂字ヨケジ	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺7基、配石遺構2基、墓道	4, 5
33	三根公方館跡	峰町三根字中村	中世	館跡	平地		18
34	下ガヤノ木遺跡	峰町三根字ガヤノ木	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺、石蓋土壇	17
35	上ガヤノ木遺跡	峰町三根字牟田	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺、積石塚、土壇墓	2
36	サカドウ遺跡	峰町三根字牟田	弥生	埋葬遺跡	台地		4, 17
37	井手遺跡	峰町三根字下在家	縄文・弥生	遺物包含地	丘陵		17, 22
38	木坂海神社弥勒堂跡	峰町木坂字カキノロ	中世	寺社跡	社叢山腹		4, 22
39	三根遺跡	峰町三根字三根	縄文・弥生・古墳	遺物包含地	丘陵		22
40	タカマツノダン遺跡	峰町三根字エイシ	縄文・弥生	遺物包含地	丘陵	箱式石棺2基	17, 22, 25
41	白岳遺跡	峰町吉田字元白嶽	弥生	銅矛出土地	山頂		18
42	チゴノハナ遺跡	峰町三根字元白嶽	古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2基、土坑1基	17
43	恵比須山遺跡	峰町吉田字橋辺	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺12基、壺棺1基	1, 2, 4
44	吉田遺跡	峰町吉田字吉田古河	縄文・弥生・中世	遺物包含地	台地		17, 22, 26
45	蒙古塚遺跡	峰町吉田字瀬の隙	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺2基	2
46	穿岩遺跡	峰町穿岩	縄文	遺物包含地	—		22
47	対馬門通寺宗家墓地	峰町佐賀字寺ノ前	中世	石造物	丘陵		18
48	佐賀の館跡	峰町佐賀	中世	館跡	平地		18
49	佐賀貝塚	峰町佐賀	縄文	貝塚	平地	住居跡3棟、土坑	4, 22, 24
50	小姓島遺跡	峰町佐賀字虫バイ	弥生	埋葬遺跡	小島	箱式石棺	4, 17
51	エーガ崎遺跡	峰町佐賀字内田ノ浦	弥生	埋葬遺跡	岬	組合式石棺	4, 17
52	観音鼻遺跡	豊玉町千尋義舟カクシ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺3基	17
53	住吉平貝塚	豊玉町曾字前原住吉	縄文・弥生	貝塚	丘陵		22
54	輪島古墳	豊玉町曾字ワジマ曾前原	古墳	古墳	独立丘陵		18
55	クワバル古墳	豊玉町曾字クワバル	古墳	古墳	丘陵	箱式石棺2基	21
56	大綱遺跡	豊玉町大綱字大綱際	弥生	銅矛出土地	山腹		25
57	多田越遺跡	豊玉町唐洲字多田越	縄文	遺物包含地	海岸		22
58	ヌカシ遺跡	豊玉町廻字ヌカシ	縄文	遺物包含地	平地	住居跡、炉跡、集石	22
59	加志々遺跡	豊玉町唐州字加志々	弥生	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺	17
60	西加藤遺跡	豊玉町嵯峨加藤	縄文	遺物包含地	平地・海底		17, 22
61	黒島遺跡	豊玉町佐志賀字ヨロ	弥生	銅矛出土地	丘陵		4, 25
62	貝口赤崎遺跡	豊玉町貝口字テナシ浦	縄文・弥生・古墳	遺物包含地	岬	箱式石棺4基	17, 22
63	スス崎遺跡	豊玉町佐志賀字スス	古墳	埋葬遺跡	岬	石室状遺構1基	17
64	シゲノダン遺跡	豊玉町佐保字シゲノダン	弥生	埋納遺跡	平地		4
65	唐崎遺跡	豊玉町佐保字キロスガ浜	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基	4
66	イノ際遺跡	豊玉町佐保字イノ際	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺3基、集石遺構2基	16
67	キロスガ浜遺跡	豊玉町佐保字キロスガ浜	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺4基	4, 17
68	佐保遺跡	豊玉町佐保	縄文	遺物包含地	—		22
69	クロキ南島遺跡	豊玉町卯麦字クロキ	弥生	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺1基	4, 17
70	佐保浦赤崎遺跡	豊玉町卯麦字アカサキ	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺3基、堅穴式石室1基	4, 17
71	ソウザキ遺跡	豊玉町卯麦字ソウザキ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	石棺1基	18
72	卯麦タマサキ第1・第2地点遺跡	豊玉町卯麦字タマサキ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	第1地点：石棺3～4基、第2地点：石棺1基	18
73	糠ノ浜遺跡	豊玉町卯麦字糠ノ浜	弥生	銅矛出土地	海岸		4
74	ハロウ遺跡	豊玉町仁位字ハロウ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	A地点：箱式石棺4基、堅穴式石室1基 B地点：箱式石棺3基	4, 11, 17
75	堂ノ内遺跡	豊玉町仁位字清玄寺堂ノ内	縄文・弥生	遺物包含地	丘陵		22
76	東の浜遺跡	豊玉町仁位字モシタ	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺	4, 17
77	和多都美神社遺跡	豊玉町仁位字和宮	弥生	銅矛出土地	丘陵		25
78	大タマ遺跡	豊玉町佐志賀字大タマ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	石棺2～3基	18
79	貝船崎古墳	豊玉町貝船字貝船崎	古墳	古墳	岬	墳丘墓、箱式石棺1基	17
80	糸瀬浦古墳	豊玉町糸瀬字納屋ノ浜	古墳	古墳	岬		18
81	白方崎1・2号石棺	美津島町濃部シラカタ	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵		18

第2表 対馬の主要遺跡地名表(2)

No.	遺跡名	住所	時代	種類	立地	備考	文献
82	草島1・2号石棺	美津島町濃部シロカタ	弥生・古墳	埋葬遺跡	島		18
83	賀谷遺跡	美津島町賀谷字ハルノクチ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2基	18
84	海落第4遺跡	美津島町鴨居瀬字海落	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	竪穴式石室1基、箱式石棺1基	17
85	住吉橋下遺跡	美津島町鴨居瀬字住吉	縄文	遺物包含地	海岸		18
86	箕島遺跡	美津島町大山字箕島	古墳	埋葬遺跡	島	箱式石棺、積石塚172基	23
87	赤崎遺跡	美津島町島山字赤崎	古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺5基	18
88	弘法浦遺跡	美津島町島山字弘法ヶ浦	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺3基	17
89	平野浦遺跡	美津島町島山字平野	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺	18
90	黒見崎第1・第2遺跡	美津島町島山字黒ミ崎	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺	18
91	矢取崎遺跡	美津島町島山字狭瀬戸	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基、積石塚1基	18
92	玉調第2～4遺跡	美津島町大山字五次郎・玉調	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺4基	17
93	ハナデンボ北遺跡	美津島町大山字玉調	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺3～4基	17
94	和田ノ浦第1・第2遺跡	美津島町大山字陰和田浦・和田浦	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	第1：箱式石棺 第2：箱式石棺3～4基	18
95	大山城跡	美津島町大山字浅茅山	中世	城跡	山		18
96	入道ヶ浦第2・第3遺跡	美津島町大吹字入道ヶ浦	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	第2：箱式石棺 第3：箱式石棺2基	18
97	碓ノ浦遺跡	美津島町小船越字島ノ浦	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2基	18
98	姫神社遺跡	美津島町籍方字在所	弥生・古墳	埋葬遺跡	台地	箱式石棺10数基	18
99	かがり松鼻遺跡	美津島町久須保字藏ノ本	弥生	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基	12
100	久須保遺跡	美津島町久須保字久須保	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2～3基	18
101	葉畑南遺跡	美津島町大船越字古里	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基、盤棺2基、配石遺構1基	2
102	白連江浦西遺跡	美津島町竹敷字シレエ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺3基	17
103	白連江第1遺跡	美津島町竹敷字シレエ	縄文・弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺6基	17
104	樽ヶ浜遺跡	美津島町難知字陽樽ノ濱	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基	25
105	根曾古墳群	美津島町難知字字ノ	古墳	古墳	丘陵	古墳6基(前方後円墳2基、横穴式石室他)	2
106	サイノヤマ古墳	美津島町難知字濱ノ原陽	古墳	古墳	台地	円墳、横穴式石室	2
107	出居塚古墳	美津島町難知字濱ノ原陰	古墳	古墳	丘陵	前方後方墳	2
108	久須ノ浦第1・第2遺跡	美津島町難知字久須ノ濱・カシズ	古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺数基	18
109	ヒギレ鼻遺跡	美津島町難知字カシズ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1基	18
110	一本松遺跡	美津島町難知字口千博ノ濱	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	箱式石棺数基	18
111	モウコ崎遺跡	美津島町竹敷字在所	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺数基	18
112	みそくれ鼻遺跡	美津島町竹敷字ユリゴシ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺1～2基	18
113	小式崎遺跡	美津島町竹敷字ユリゴシ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺	17
114	皇后崎第1～4遺跡	美津島町難知字皇后崎	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2～3基	22
115	中道壇遺跡	美津島町洲瀬字中道壇	弥生	埋葬遺跡	台地	箱式石棺12基	3, 4
116	金田城跡	美津島町黒瀬字城山他	古代	城跡	山	城戸3、水門跡、石塁	15
117	箕形遺跡1・2	美津島町箕形字タガエ	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	1：箱式石棺1基 2：箱式石棺2基	18
118	今里浦遺跡	美津島町尾崎今里字在家	弥生・古墳	埋葬遺跡	岬	箱式石棺2基	18
119	水崎遺跡	美津島町尾崎字田ノ浦	中世	遺物包含地	平地	ピット、焼土	14
120	阿連瀬戸原遺跡	厳原町阿連字瀬戸原	弥生	銅矛出土地	丘陵		4, 25
121	セトバル古墳	厳原町阿連字瀬戸原	古墳	古墳	丘陵	石棺4基	18
122	矢立山古墳群	厳原町下原字矢立	古墳	古墳	丘陵	方墳3基、横穴式石室	2
123	島山遺跡	厳原町上槻字磯崎原	弥生・古墳	埋葬遺跡	丘陵	石棺1基	18
124	久根田舎遺跡	厳原町久根田舎字御所山	弥生・古墳	銅矛出土地	平地		4
125	オテカタ遺跡	厳原町豆敷字オテカタ	弥生・古墳	遺物包含地	丘陵		4
126	保床山古墳	厳原町豆敷字東保床	古墳	古墳	丘陵	横穴式石室	2
127	豆敷中学校遺跡	厳原町豆敷字東神田	古墳	埋葬遺跡	丘陵	石棺数基	18

第1・2表に関する参考文献

- 安楽 勉ほか 1988『原始・古代の長崎県』通史編 長崎県教育委員会
- 小田富士雄ほか編 2002『国史跡矢立山古墳群—保存修理事業に伴う発掘調査—』厳原町文化財調査報告書第7集 福岡大学考古学研究室 厳原町教育委員会
- 甲斐田彰・塩塚浩一編 1996『池ノ浦墳墓—長崎県下県郡美津島町所在—』美津島町文化財調査報告書第7集 美津島町教育委員会
- 国分直一ほか 1986『えとのす』第30号 新日本教育図書
- 坂田邦洋 1976『対馬の考古学』縄文文化研究会
- 坂田邦洋 1978『韓国隆起土器の研究』昭和堂印刷出版事業部
- 坂田邦洋 1979『対馬越高尾崎遺跡における縄文前期文化の研究』『別府大学考古学研究室報告』第3冊 別府大学考古学研究室
- 副島和明編 1992『長崎県埋蔵文化財調査集報XV』長崎県文化財調査報告書第104集 長崎県教育委員会
- 副島和明編 1994『長崎県埋蔵文化財調査年報I』長崎県文化財調査報告書第113集 長崎県教育委員会
- 副島和明・古澤義久・川道寛 2013『韓・日 初期 新石器文化 比較研究』第10回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集 韓国新石器学会
- 高倉洋彰編 1980『対馬豊玉町ハロウ遺跡—長崎県下県郡豊玉町大字仁位所在箱式石棺群の調査報告—』豊玉町教育委員会
- 高野晋司編 1988『かがり松鼻遺跡—長崎県下県郡美津島町所在—』美津島町文化財調査報告書第3集 美津島町教育委員会
- 高野晋司・古門雅高編 1996『大石原遺跡』上県町文化財調査報告書第1集 上県町教育委員会
- 田中淳也・福田一志・川口洋平 1999『水崎遺跡』美津島町文化財調査報告書第8集 美津島町教育委員会
- 田中淳也 2011『金田城IV』対馬市埋蔵文化財調査報告書第6集 対馬市教育委員会
- 豊玉町教育委員会 1984『イノ際遺跡—対馬町豊玉町佐保浦所在の埋納遺構群—』豊玉町文化財調査報告書第5集
- 長崎県教育委員会 1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
- 長崎県教育委員会 1994『長崎県遺跡地図—対馬地区—』長崎県文化財調査報告書第118集
- 東 貴之・福田一志編 1998『県内主要遺跡内容確認調査報告書I』長崎県文化財調査報告書第147集 長崎県教育委員会
- 藤田和裕編 1984『コフノサエ遺跡—長崎県上県郡上対馬町所在の遺跡—』上県町文化財調査報告書第1集 上県町教育委員会
- 藤田和裕編 1998『クワバル古墳—長崎県下県郡豊玉町所在の古墳時代の墓—』豊玉町文化財調査報告書第6集 豊玉町教育委員会
- 古澤義久 2014『玄海灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格—弥生時代早期との比較—』東京大学考古学研究室研究紀要第28号
- 本田秀樹編 1993『箕島遺跡—長崎県下県郡美津島町所在—』美津島町文化財調査報告書第6集 美津島町教育委員会
- 正林 護編 1986『佐賀貝塚(略報)』峰町文化財調査報告書第8集 峰町教育委員会
- 水野清一編 1953『対馬』東方考古学叢刊 乙種第六冊 東洋考古学会
- 宮本一夫編 2004『対馬古田遺跡—縄文時代遺跡の発掘調査—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

二 越高遺跡の調査



越高遺跡A地点作業風景 2015/08/22

1. 調査経過

(1) 遺跡名称の整理

越高遺跡は、長崎県対馬市上県町越高 58 番および 30 番に所在し、越高集落に面する湾の西側海岸部に立地する。1972 年、朝鮮半島系の隆起文土器が採集されたことで、遺跡の存在が明らかとなった。発掘調査は過去 3 回にわたり実施されているが、これらの調査を通じて遺跡名称が複数存在する状況となっているため、本報告において名称の整理を行う。

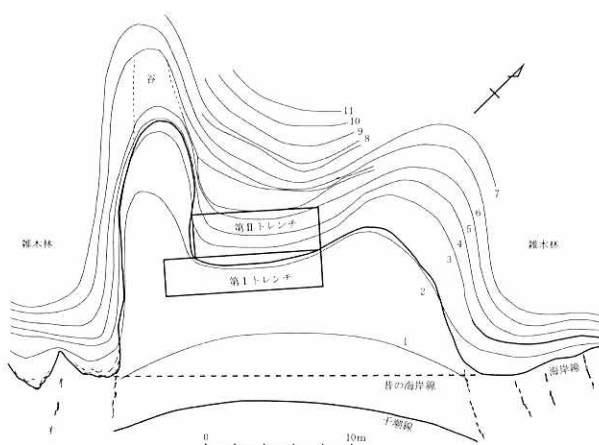
1980 年代まで、1976 年調査地点には越高遺跡、1978 年調査地点には越高尾崎遺跡の名称が与えられ、別々の遺跡として認識されていた（坂田 1978・1979）。その後 1996 年調査の際に、越高尾崎遺跡を A 地点、越高遺跡を B 地点とし、これらを総称して越高浜遺跡とする名称の整理が行われた（東・福田編 1998）。そのため、現在は越高浜遺跡という名称で埋蔵文化財包蔵地に登録されている（長崎県教委 1994）。しかし本報告にあたり、研究者間で使用する遺跡名称が統一されていない、越高浜という小字名は存在しないため、越高浜遺跡という名称はふさわしくない、といった問題点が判明した。

そこで、長崎県教育庁・対馬市教育委員会・熊本大学の 3 者で協議を行った結果、「越高遺跡」が正式な遺跡名としてふさわしいとの見解で一致した。また地点を呼び分ける場合には、1993 年調査時の「A 地点」と「B 地点」の名称をそのまま用いることとした。

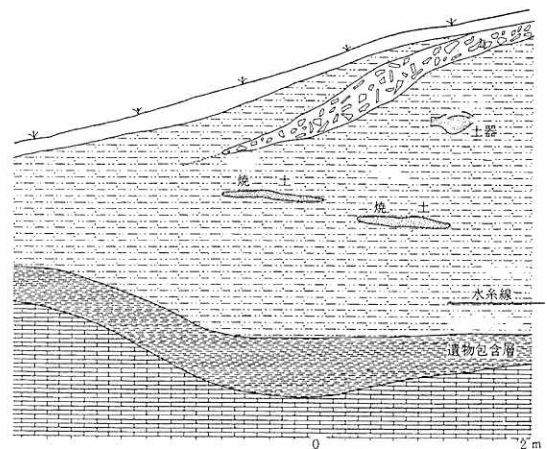
以下、既往の調査について記述するが、混乱を避けるためにこの名称を用いる。 (山元)

(2) 既往の調査（第 1～3 次調査）

第 1 次調査は B 地点を対象とし、1976 年 12 月 11～17 日の日程で実施された。調査主体は、上県町教育委員会と長崎大学医学部解剖学第二教室である。調査区は、海岸部崖面の前に第 I トレンチが傾斜地に第 II トレンチが設定された（第 4 図）。調査の結果、第 II トレンチにおいて良好な遺物包含層が 1 枚確認され、そこから多数の遺物が出土した（第 5 図）。主体は、朝鮮半島系の隆起文土器であり、器種には深鉢や壺がみられる。一方縄文土器は、前平式が 7 点出土したと報告されている。石器は石鏃・石槍・石錘といった狩猟・漁撈具、錐・石匙・削器・搔器といった加工具のほか、石斧・礮器・敲石および石核・剥片などが出土している。黒曜石については、佐賀県伊万里市腰岳産の割合が高いとされている。また、土壌墓が 2 基検出されており、どちらにも隆起文土器の供献がみられた



第 4 図 第 1 次調査 調査区位置図 (坂田 1978)



第 5 図 第 1 次調査土層断面図 (坂田 1978)

と報告されている。遺跡の時期は、出土遺物から縄文時代早期末頃に比定された。また遺物包含層より出土した炭化物の¹⁴C年代測定結果は、BC5000～BC4500年頃とされている。

第2次調査はA地点を対象とし、1978年7月16～22日に行われた。調査主体は、上県町教育委員会であり、目的は隆起文土器の編年を明確にすることであった。調査区は、崖面東寄りの遺物包含層が露出した場所に設定された(第6図)。調査の結果、遺物包含層が6枚確認されている(第7図)。出土した遺物を層位ごとに整理すると以下のようになる。

第Ⅰ層：西唐津式・曾畑式 / 削器・礫器・剥片・石核

第Ⅱ層：轟B式・西唐津式・曾畑式・隆起文土器 / 削器・搔器・礫器・石錘・敲石・剥片・石核

第Ⅲ層：轟B式・西唐津式 / 削器・石錘・敲石・石皿・砥石・剥片・石核

第Ⅳ層：塞ノ神式・轟B式・隆起文土器 / 削器・搔器・石剣様石器・石包丁様石器・扁平打製石斧・礫器・敲石・砥石・剥片・石核

第Ⅴ層：隆起文土器・沈線文土器 / 石斧・剥片・石核

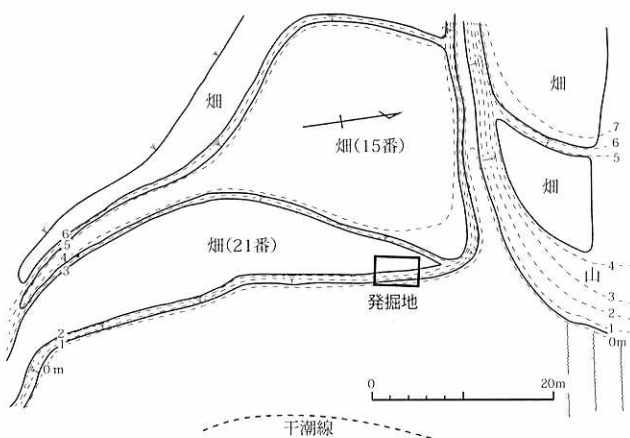
第Ⅵ層：貝殻条痕土器・隆起文土器 / 石鏃・削器・石槍・石斧・礫器・石錘・敲石・砥石・剥片

以上のように、縄文土器と隆起文土器の併行関係が判明しただけでなく、隆起文土器は下層で多く出土し、縄文土器は上層で多く出土する傾向が指摘された(坂田1979)。また、第Ⅱ層で2基、第Ⅳ層で1基の炉跡が検出されている。なお、各層より採集された炭化物の¹⁴C年代測定結果は、第Ⅱ層：BC2770年、第Ⅲ層：BC3000年、第Ⅳ層：BC3290年、第Ⅵ層：BC4450年となっている。

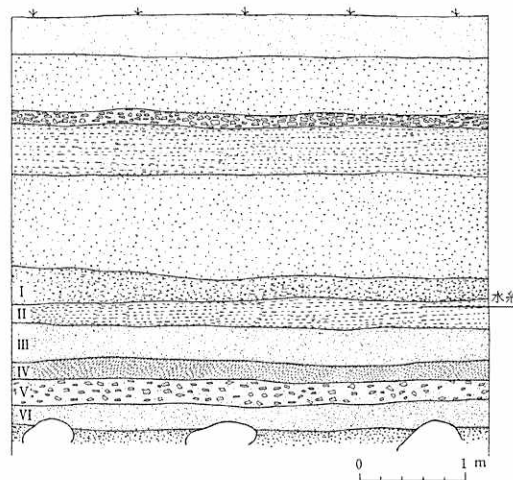
第3次調査は、A・Bの両地点を対象に1996年8月26日から9月13日にかけて実施された。調査主体は長崎県教育庁文化課であり、上県町教育委員会の協力を得て行われた。調査目的は、風雨や波の侵食により消滅が危惧される遺跡の範囲確認であった。調査区は、A地点に3箇所、B地点に2箇所設定された(第8図)。調査において明確な分層はされていないが、第3～5調査区から遺物の出土が確認されている。

A地点の第3調査区では、隆起文土器とこれに伴う沈線文土器、貝殻条痕が施された土器が出土している。石器としては頁岩製のスクレイパーをはじめ、黒曜石の剥片や石核、磨石などが確認されている。B地点の第5調査区では隆起文土器・刺突文土器・隆起文土器に伴う沈線文の施された壺が出土している。また遺物の出土状況から、予想以上に遺跡の残存状態は良好であることが判明した。

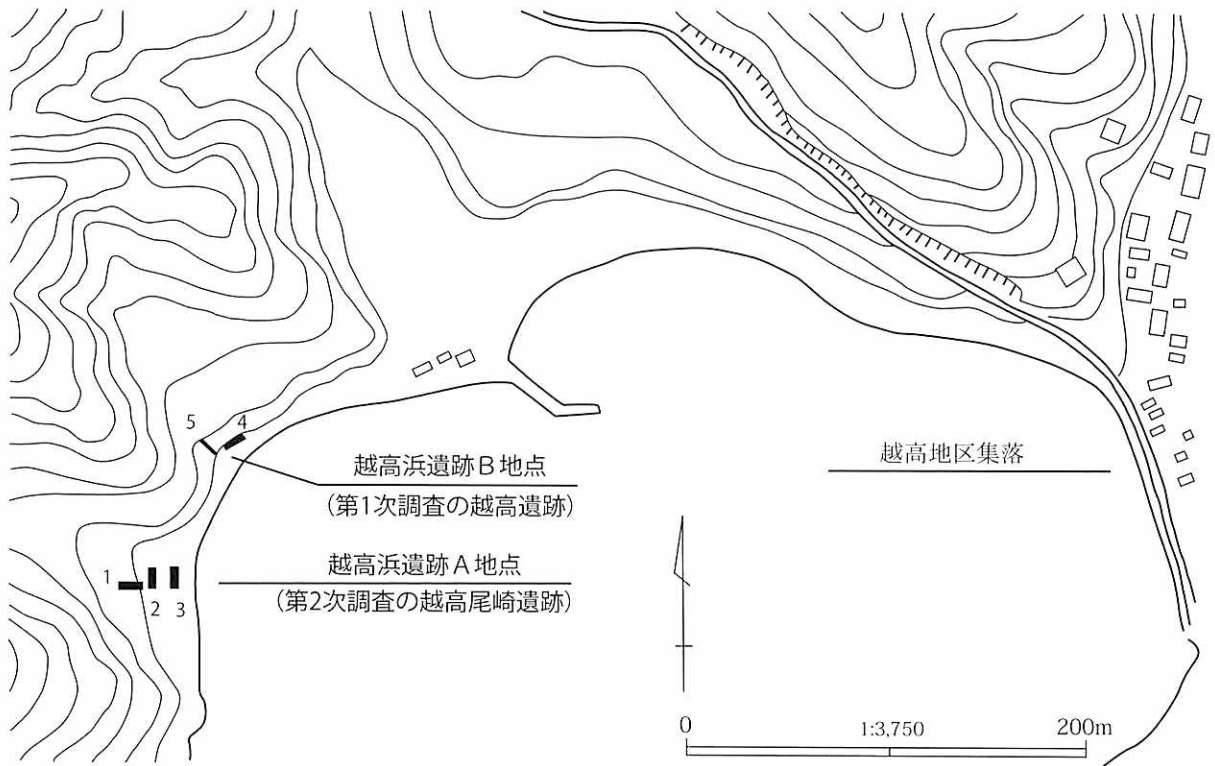
(譚)



第6図 第2次調査 調査区位置図 (坂田1979)



第7図 第2次調査土層断面図 (坂田1979)



第8図 第3次調査 調査区位置図 (東・福田編 1998 を一部改変)

(3) 今回の調査 (第4次調査)

越高遺跡を対象とした調査は過去に3回実施されているため、今回の調査は第4次調査となる。調査は、2015年8月16～24日の計9日間実施した。調査の目的は、縄文時代早期末から前期前葉にかけての日韓交流の実態解明である。今回は遺物包含層の堆積状況の把握および遺跡保護に向けた範囲の確認を行った。調査区は土層断面の比較を行うため、過去の調査区とほぼ同一地点に設けることとし、A・B両地点の崖面に2箇所ずつ設定した(第9図)。いずれも露出した崖面を削り、土層の堆積状況を観察しながら作業を進めた。また遺物の出土に際しては、トータルステーションを用いて位置情報の記録を行った。使用したレベル高は、地籍図根三角点D7-1より移動したものであるが、座標については現場座標を用いた。今回設置した基準点は、第3表に示している。また今回は、発掘調査と同時に遺跡周辺の略測図作成も実施した(第9図)。

調査の結果、A地点においては、海岸部土層が第2次調査の結果と概ね同様の堆積を示すことを確認した。しかし遺物の出土はなく、各層の時期比定は困難であった。一方谷部では、隆起文土器や石器を含む遺物包含層を確認できたため、遺跡の範囲は北西部に広がる可能性が高まった。

B地点においては、複数の遺物包含層を確認できた。6層については、隆起文土器を含む遺物が多数出土したことなどを根拠に、第1次調査の遺物包含層に相当するものと想定し、調査を進めた。また第1次調査では遺物包含層直下より砂岩の岩盤層が検出されていたため、今回も6層下部から岩

第3表 越高遺跡基準点 (現場座標)

基準点	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
K1	0.000	0.000	2.874	
K2	-27.982	9.693	1.707	
K3	28.449	0.000	3.400	
K4	-39.849	16.151	1.972	
K5	4.346	-7.769	4.381	
K6	-47.338	12.954	2.975	
D7-1	171631.659	-15792.779	5.781	三角点 (世界測地系)

盤層が検出されるものと考えた。そこで海岸部調査区の西端にトレンチを設定し確認作業を行ったが、岩盤に相当する層は検出されなかった。

今回は両地点ともに小規模な調査であったものの、遺物の出土状況から遺跡は比較的良好に残存しているものと判断した。(山元)

2. 越高遺跡A地点

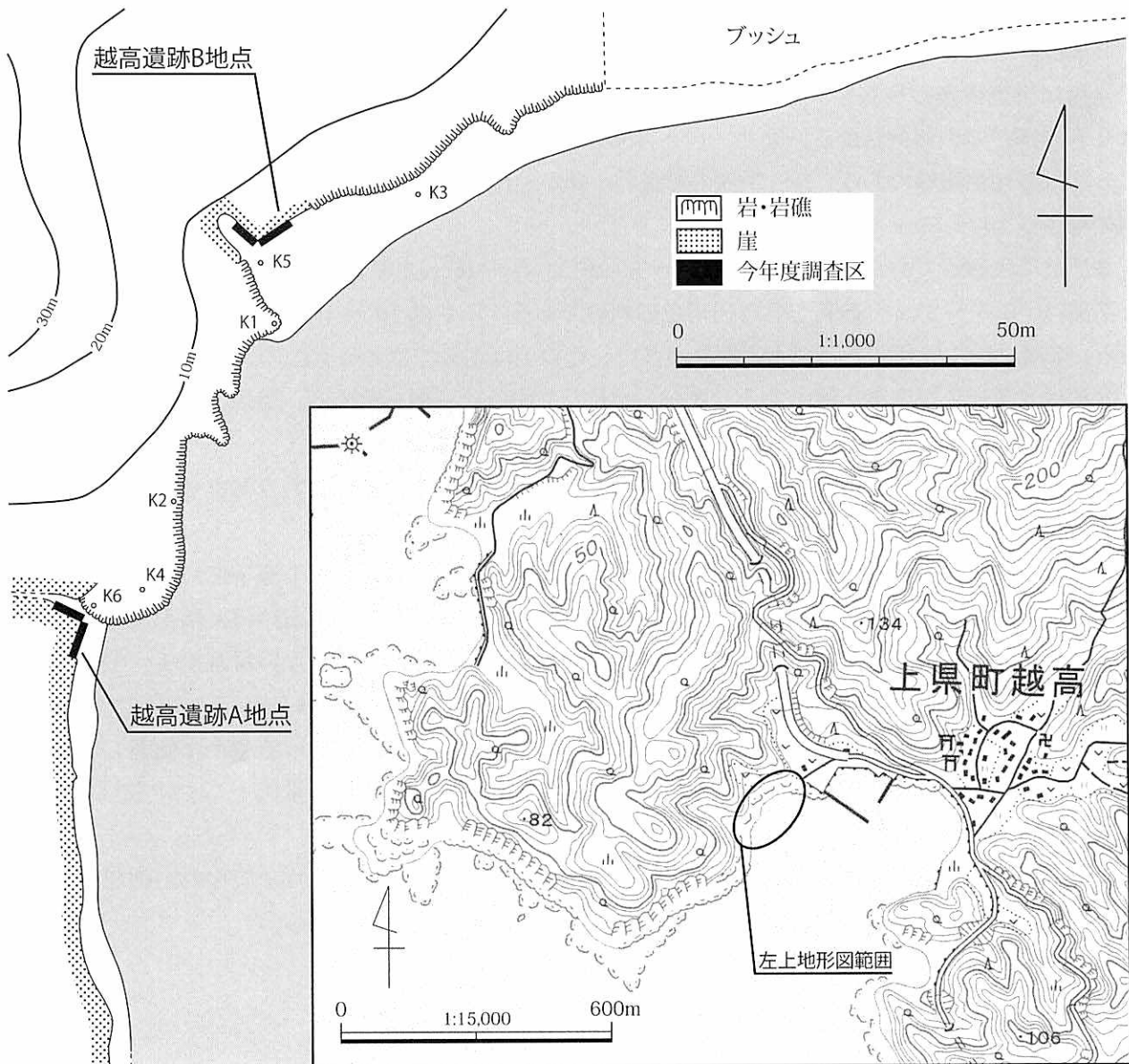
(1) 調査区の設定 (第9図)

越高遺跡A地点は同B地点から北西に約60mの位置にあたる。B地点からA地点の間は岩礁となっており、この岩礁が途切れると海岸沿いに高さ4m程度の崖面が続く。この崖面に遺物包含層が露出している状況である。満潮時には海岸線が遺跡近くまで迫り、恒常的ではないものの波の侵食にさらされているものと思われる。またA地点の西側一帯は斜面を利用した段畑が整備されているが、現在は使用されていない。

今回の調査では、遺物包含層の堆積状況の把握と保護に向けた遺跡の範囲確認を目的とし、海岸部および谷部の崖面にそれぞれ1箇所ずつ調査区を設定した。

海岸部の調査区は第2次調査(1978年)時とほぼ同一地点に、幅5.0m、高さ3.6mの規模で設定した。

谷部の調査区は海岸部調査区と接する崖面に、幅2.7m、高さ2.7mの規模で設定した。谷部は、



第9図 越高遺跡調査区位置図

今回初めて調査が実施された箇所である。なお谷部と呼称しているが、実際には一帯に広がる段畑へつながる通路と考えられる。

いずれの調査区においても、崖面を削り、土層を観察する形で調査を行った。(嘉戸)

(2) 遺跡の層序 (第10・11図)

海岸部調査区では耕作土層を含め8枚、谷部調査区では耕作土層を含め4枚の堆積層を確認した。両地点ともほぼすべての層に細長い小礫が含まれていたが、これらは遺跡周辺の地質を構成する対州層群の風化により生じたものと考えられる。海岸部北側および谷部東側には攪乱層が存在しており、樹根によるものや畑地整備の際の流れ込みと想定される。攪乱層は広範囲にわたり、海岸部と谷部の土層の対応関係を確認することが困難であったため、それぞれ独立した土層番号を用いることとした。

海岸部調査区 海岸部では耕作土層を含め、8枚の堆積層を確認できた。第2次調査ではほぼ同一地点が調査され、多数の遺物が出土しているが、今回はいずれの層からも遺物は確認されていない。

1層は表土層である。畑地の耕作土であり、厚さは1.0～1.2mである。

2層は褐色混礫土層であり、粒子の粗い砂の中に少量の礫が混じる。厚さは70～80cmである。

3層は暗褐色砂利層である。やや粘質の土に砂利と礫が混在する。厚さは30～50cmである。

4層は褐色混礫砂利層で、厚さは15～35cmである。3～5cmの細長い小礫を主体とし、隙間には0.5cmほどの砂利が詰まる。また、10～15cm角の礫が散見される。

5層は暗褐色礫層である。1～3cmの細長い小礫が全体的に密集しており、10cm角の礫が混在する。層の厚さは10～15cmである。

6層は褐色砂層である。層の厚さは20～30cmで、5～15cmの細長い礫を含む。

7層は、0.5～3cmの砂利を含む黒褐色砂利層である。厚さは10～15cmであり、他の層と比較すると、7層は礫や砂利に対して土の割合が多い。その土は粘質ではあるものの、しまりが悪く、粗い。

8層は、黄褐色混礫粘土層である。他層と比較して明るい色調を呈する。当層は谷部の4層に対応すると考えられるが、谷部4層の様相に加え、20cm角の大礫も含む。

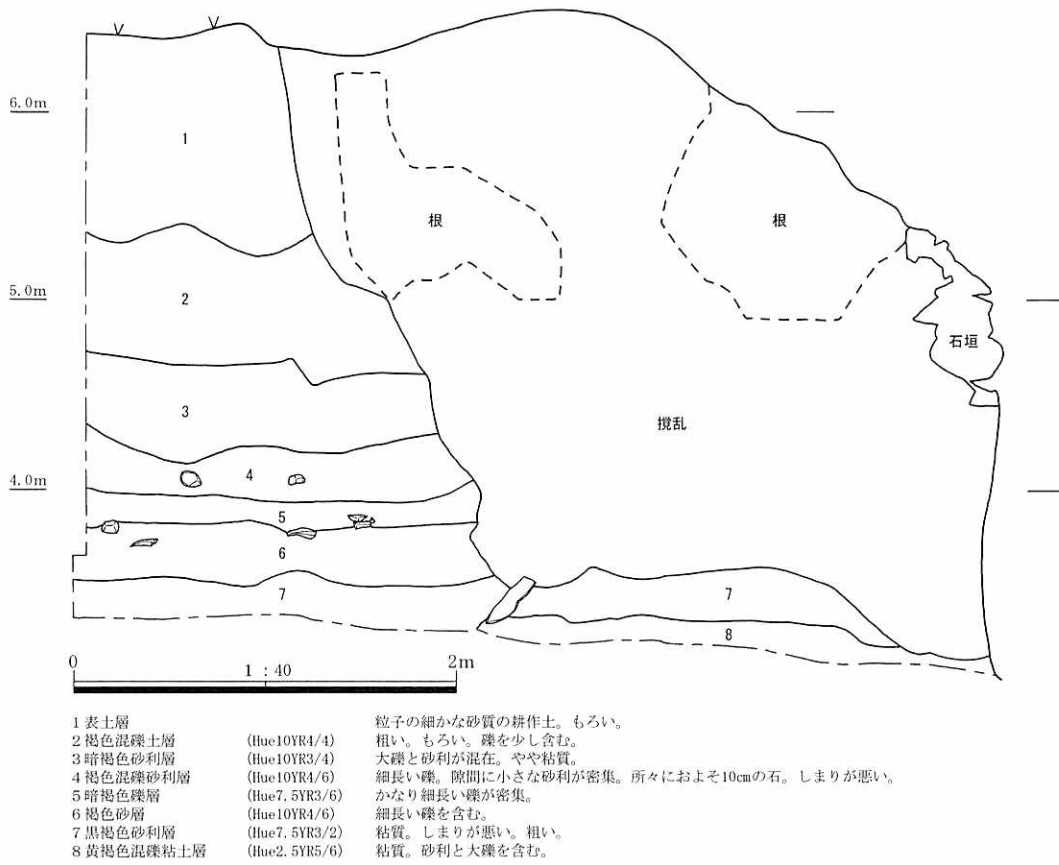
谷部調査区 谷部では耕作土層を含め、4枚の堆積層を確認できた。そのうち2層および4層が遺物包含層である。

1層は耕作土層であり、20～30cmの厚さでほぼ水平に堆積していた。1層下部には畑地整備の際に設けられたと思われる石垣が存在する。石垣の下には厚さ約1.0～1.4mの攪乱層が海岸部に向けてゆるやかに傾斜しながら堆積している。攪乱層は、細長い小礫が混在しない攪乱層Ⅰ、混在する攪乱層Ⅱに分けられる。なお、攪乱層Ⅱからはわずかながら遺物が出土している。

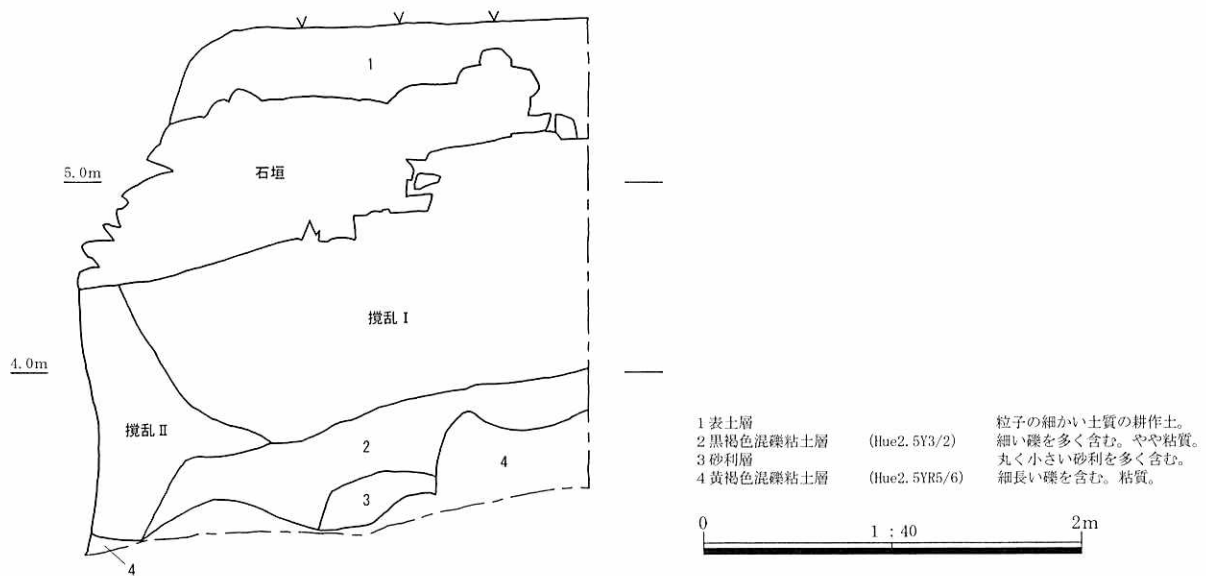
2層は黒褐色混礫粘土層であり、厚さ15～20cm程度で海岸部に向けてゆるやかに傾斜しながら堆積している。また、黒曜石の剥片および隆起文や沈線を有する土器片が少量出土している。

3層は厚さ10～15cmの砂利層である。遺物は出土していない。

4層は黄褐色混礫粘土層であり、黒曜石の剥片や内外面条痕調整の土器片、炭化物が確認されている。また、この層は土質や色調から海岸部の8層に対応するものと思われる。(嘉戸)



第10図 A地点海岸部土層断面図



第11図 A地点谷部土層断面図

(3) 調査所見

海岸部調査区 海岸部の調査では8枚の堆積層を確認できた。しかし、遺物はいずれの層からも出土していない。以下、第2次調査の結果と比較を行う。

第2次調査においては、耕作土を含む表土層の他に、6枚の遺物包含層が確認されている(第7図)。上から順に、褐色混土砂利層(第I層)・黒褐色砂質粘土層(第II層)・褐色砂質粘土層(第III層)・黒褐色粘土層(第IV層)・褐色混礫砂利層(第V層)・黒褐色砂質粘土層(第VI層)がほぼ水平に堆積していたとされている。各層の厚さは、表土層が約2.5m、遺物包含層については第III層の約30cmの他は、それぞれ約20cmである。各層の時期は出土土器から、第I・II層は縄文時代前期後葉、第III・IV層は縄文時代前期中葉、第V・VI層は縄文時代前期前葉に相当するとされている(坂田1979)。

本調査における土層を確認すると、耕作土を含む厚い堆積の下に厚さ20cm程度の堆積層が5枚みられることから、第2次調査の土層堆積状況と概ね一致している。そこで、第2次調査と本調査における層位の対応関係について検討する。本調査では遺物が出土していないため、各層の土質や色調を比較し、対応関係を確認した。その結果、今回確認された1～3層は、第2次調査の表土層に対応し、4～8層は、第2次調査の第I～V層にそれぞれ対応するものと判断した。しかし、土質や色調が厳密に一致しているわけではない。例をあげると、7層は粘質はあるものの粗く、土のしまりが悪かったが、これに対応する第2次調査の第IV層は、粘土層と判断されている。こうした問題は、土質や色調を判断する観点が統一されていないことが一因と思われ、対応関係の根拠とするには不安が残る。

なお、第2次調査においては第VI層の下部に人頭大の円礫を多数含む砂利層が検出されている。当層からの遺物出土は報告されていないため地山層と推測されるが、調査期間の制約もあり、今回は確認に至らなかった。

谷部調査区 谷部を対象とした調査は今回初めて実施され、4枚の堆積層を確認できた。海岸部土層との対応関係については、攪乱層の存在により把握が困難であったが、4層のみ海岸部の8層と対応することを確認した。

遺物は2層および4層より出土している。2層では隆起文や沈線文を有する土器のほか黒曜石の剥片、4層では内外面条痕調整の土器、黒曜石の剥片を確認している。土器は数量が少なく、小片であったため、型式は特定できていない。また、遺物包含層は調査区外へと継続するような堆積状況を示すため、遺跡の範囲は北西部まで広がる可能性が高いものと思われる。

成果と課題 今回の調査では、海岸部調査区において8枚の堆積層を確認すると同時に、第2次調査時の土層堆積状況と概ね一致していることが判明した。しかし本調査と第2次調査時における各層の対応関係については、土質や色調の類似性に基づいた判断であるため、根拠として十分と言えない。今後は出土遺物の比較検討に基づいた対応関係の把握が必要である。なお、今回遺物が出土しなかった原因は明確ではないが、調査が崖面の精査のみであったことも一因と思われる。また、今回は第2次調査で検出されている地山層の確認まで至っていないため、今後の調査では今回検出した8層以下について掘り下げを行い、層位を確定させる必要がある。

一方谷部調査区では、遺物の出土量は少なかったものの遺物包含層を2枚確認できており、その堆積状況から遺跡は北西側へと広がる可能性が高いと判断した。遺跡の範囲を確定させるためにも、今回の調査区をさらに北西側へと拡張し、遺物包含層について確認を行う必要がある。(大隈)

3. 越高遺跡B地点

(1) 調査区の設定 (第9図)

越高遺跡B地点は山裾の標高4～8mに位置している。当地点には土層がむき出しの崖面が存在しており、南東部には角礫で構成された浜辺が形成されている。また、A地点と同じく、崖面には遺物が露出している状況であり、この崖面は恒常的ではないものの風雨や波による侵食を受けているものと思われる。なお、当地点の北西部は雑木林となっている。今回の調査は、遺物包含層の堆積状況の把握および遺跡保護に向けた範囲の確認を目的とし、海岸部および谷部の崖面にそれぞれ調査区を設定した。

海岸部の調査区は、第1次調査(1976年)の際に設定された第IIトレンチとほぼ同一箇所に設定した。調査区の規模は幅4.3m、高さ3.0mである。また調査区西側には、地山の検出を目的として幅0.5m、長さ1.0mのトレンチを設定した。

谷部の調査区は、海岸部の調査区と隣接する形で、幅3.9m、高さ2.9mの規模で設定した。位置は、第3次調査(1996年)の際に設定された第5調査区と同一箇所である。なお、谷部は人為的な削平の痕跡が見られないことから、後世の侵食で形成されたものであると考えられる。

いずれの調査区も、露出した崖面を削り、精査する形で調査を行った。(松浦)

(2) 遺跡の層序 (第12・13図)

今回の調査では、海岸部および谷部の層序に概ね対応関係が確認されたが、いずれか片方の調査区でしか確認できなかった層も存在する。

海岸部の層序は表土から始まり、その下に大きな攪乱層が存在し、以下2～8層が堆積する。ただし谷部で確認された5層は、海岸部では確認できなかった。谷部の層序は上から表土、未調査部分、攪乱層と続き、3～6層まで堆積しているが、海岸部で確認された2層は確認できなかった。なお、今回の調査で確認した層には細長い形状の礫が含まれているが、これらの礫は対州層群の頁岩が風化してできたものであると考えられる。

1層は表土である。黒褐色の砂層で礫は含まない。しまりが悪く、遺物の出土はない。

2層は厚さ20～30cmの褐色の砂礫層である。含まれる礫の大きさは1～3cmであり、しまりは良い。遺物は数点の土器片が出土している。

3層も同じく褐色の砂礫層である。礫の大きさは1～2cmと2層に含まれる礫よりやや小振りである。また、他層と比べ砂質である。層の厚さは海岸部で50～60cm、谷部では10～80cmであり、しまりが悪い。遺物は海岸部で数点の土器片、谷部で石皿と数点の土器片が確認されている。

4層は褐色の砂礫層であり、礫の大きさは3～5cmと他層に含まれるものに比べ大きい。また、礫が主体の層ではあるがしまりは良い。海岸部の層の厚さは30～60cm、谷部は40cmで、海岸部からは磨石が確認されているが、その他の遺物は出土していない。谷部で遺物は確認されていない。

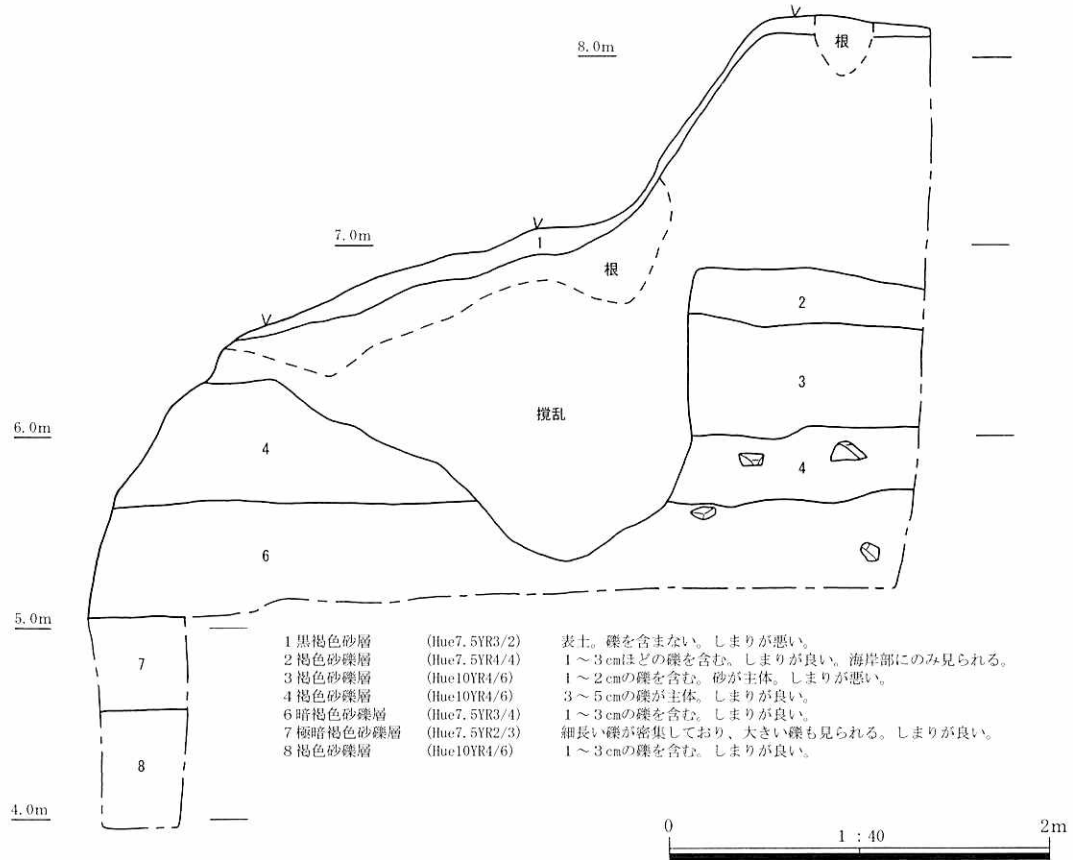
5層は褐色の砂礫層で、1～3cmの小礫を含んでいる。この層の厚さは20cmで、海岸部に向かってゆるやかに傾斜している。遺物は出土していない。

6層は暗褐色の砂礫層である。礫の大きさは1～3cmで、しまりは良い。層の厚さは海岸部で40～60cm、谷部で50cmである。遺物は隆起文を有する土器片や石器、黒曜石剥片、炭化物が出土している。特に土器片は海岸部の東側および谷部の北側から集中して出土した。

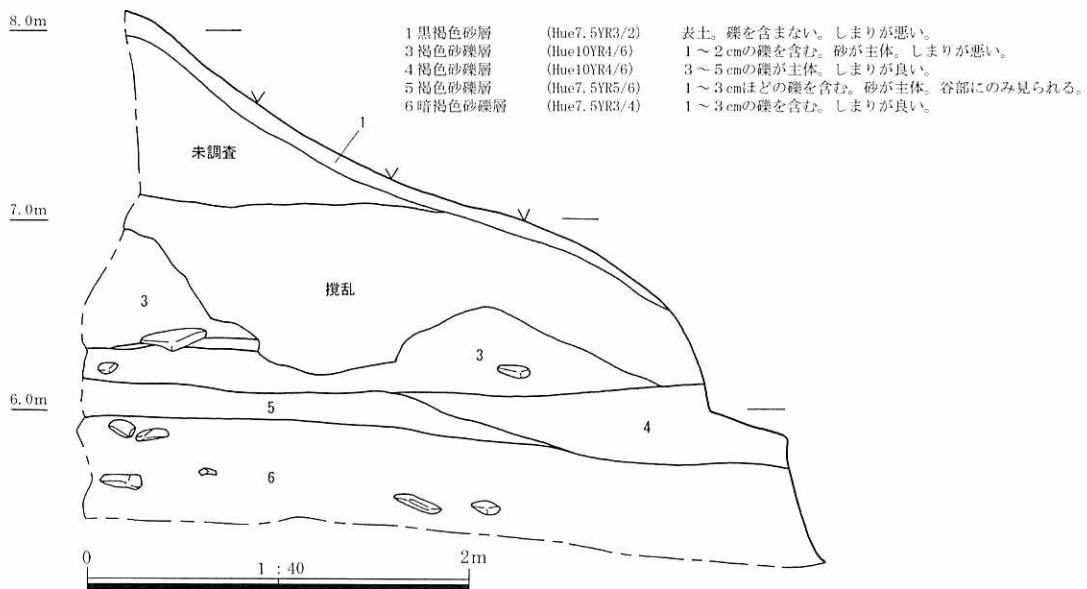
二 越高遺跡の調査

7層は褐色の砂礫層である。1～2cmの小礫が主体で3～5cmの比較的大きな礫が含まれている。また、砂礫層ではあるがやや粘土質であり、しまりは良い。厚さは50cmで、土器片が2点出土している。なお、7層以下は海岸部に設けたトレンチで確認できた層である。

8層は褐色の砂礫層である。1～3cmの小礫を含んでおり、しまりは良い。最深部から土器片が1点出土している。現状で確認できた層の厚さは65cmである。 (松浦)



第12図 B地点海岸部土層断面図



第13図 B地点谷部土層断面図

(3) 調査所見

今回行った調査の結果、越高遺跡B地点では8枚の堆積層を確認することができた。そのうち遺物が出土した層は、2～4層および6～8層である。

遺物出土状況 まず、今回の調査における遺物の出土状況について述べる。今回は崖面に露出した遺物包含層を精査したのみで、本格的な発掘調査は実施していない。そのため、得られた遺物はわずかであった。各層の出土遺物点数を第4表に示している。これを見ると、6層を除いた各層からは数点の遺物が出土しているに過ぎず、遺物の大半は6層から出土していることが分かる。特に海岸部調査区の6層東側においては、土器片と炭化物の集中的な出土が確認されている。

第4表 B地点出土遺物点数

	土器	石器
1層	0	0
2層	5	0
3層	6	1
4層	2	1
5層	0	0
6層	69	13
7層	4	0
8層	1	0

各層から出土した土器には、縄文土器と判断できるものは含まれておらず、各層の明確な時期は不明である。しかし、いずれの層においても隆起文土器が出土しているため、韓国の新石器時代早期、つまり縄文時代早期末から前期前葉に相当するものと思われる。また、3層出土の隆起文土器に関しては、6層出土のものと比較して隆起文の成形法に簡略化がみられるなど、時期差を示すことも判明した。なお、谷部は今回の調査区から北西に3mほど続いており、東西の両崖面には土器片が露出していた。6層も未調査の北西側へと続くような堆積状況を示すため、遺跡の範囲も北西部に広がる可能性が高いと考えられる。

第1次調査との比較 次に第1次調査と本調査の土層堆積状況について比較する。第1次調査では遺物包含層が1枚確認されており、そこから隆起文土器をはじめとした多数の遺物が出土している。一方、本調査では6層から最も多くの遺物が出土したことから、第1次調査の遺物包含層にあたるものと推測される。そこで炭化物の年代測定結果を比較する。6層より出土した炭化物の測定結果は、紀元前5000～4700年であった。一方第1次調査時の遺物包含層より出土した炭化物の測定結果は、紀元前5000～4500年と報告されている。この値には暦年較正が行われていないため、較正を行うと、紀元前5800～5300年と今回の測定値より800年ほど古い年代となった。そのため、6層と遺物包含層の対応関係については、今後の調査結果を踏まえて判断する必要がある。

また、第1次調査では遺物包含層直下に砂岩の岩盤層が検出されていることから、海岸部調査区西端においてトレンチを設定し確認を行った。その結果、6層下部には7層、8層が続き、岩盤に相当するものは検出できなかった。なお、7層および8層からも少数ながら遺物が出土しており、遺物包含層であると判断した。

成果と課題 今回の調査では8枚の堆積層を確認し、うち6層は遺物の出土量から第1次調査における遺物包含層に対応するものと思われた。しかし、6層以下は第1次調査と異なる堆積状況が確認された。こうした齟齬が生じた要因は明らかではないが、遺物包含層出土の炭化物の年代は6層出土の炭化物よりも古いため、遺物包含層が7・8層にあたる可能性も考えられる。今後は、岩盤層の検出のほか、7・8層の炭化物についても分析を行う必要がある。また各層からは、隆起文土器が出土したものの、縄文土器は確認できていない。出土した隆起文土器も少量であったため、各層の明確な時期比定は困難であった。今後の調査において資料数を増やし、再度検討が必要である。

今回の調査により、遺跡は比較的良好に残存していることを再確認できた。遺跡がどの程度の範囲に広がるのかは、今後遺跡を保護する際にも必要な情報であるため、より明確にすべきである。

以上を踏まえ、遺跡の全体像を明らかにするために、今後も継続した調査が必要である。(白岩)

4. 出土遺物

(1) 土器 (第14図、第5表)

A地点 A地点では谷部調査区でのみ土器が出土しており、計24点を数える。層位別に整理すると、攪乱層Ⅱ6点、2層5点、4層10点、層位不明3点である。土器片はいずれも細片であり、型式や器形が明確に分かる個体はなかった。

1は隆起文土器の胴部片である。外面には粘土紐貼り付けにより隆起文が施されている。残存部分には横位の隆起文が3条確認でき、下位の隆起文には刻目が施されている。また、内面には横位の条痕調整が施されている。攪乱層Ⅱ出土。なお図示していないが、内外面に条痕調整の施された土器片や沈線を有する土器片も出土している。

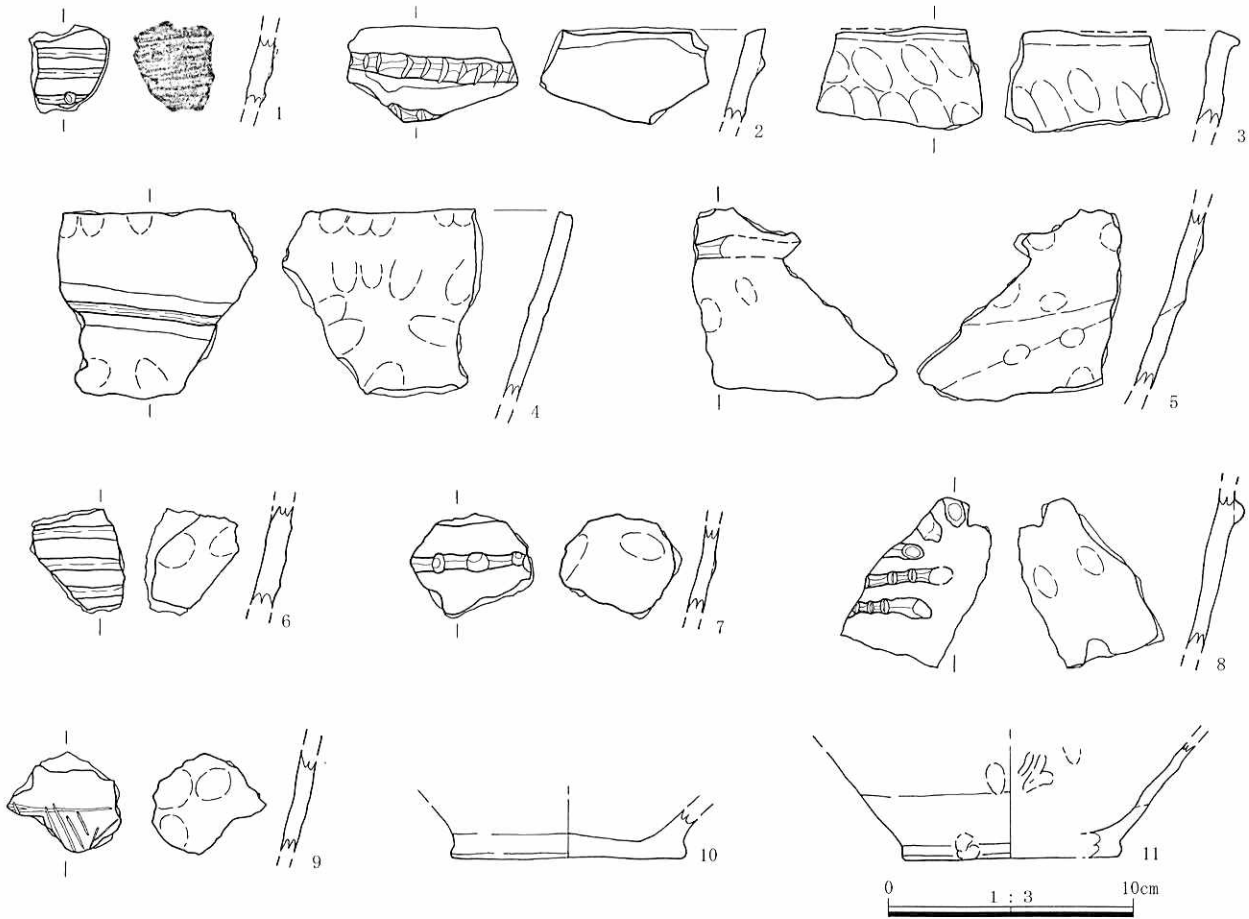
B地点 B地点では計93点の土器が出土した。層位別にみると、2層5点、3層6点、4層2点、6層69点、7層4点、8層1点、層位不明6点である。いずれも隆起文土器と考えられるが、3～5cmほどの細片が多く、図示できるものはわずかであった。

2～4は隆起文土器の口縁部である。2は口縁部にかけてわずかに内湾しており、口縁端部には面が形成される。外面は丁寧にナデ調整された後、横位の隆起文が2条施されている。口縁部から数え、1条目の隆起文は断面が三角形を呈しており、右斜め方向からへら状工具で刻目が施されている。2条目の隆起文は、1条目のものと比べると隆起せず、刻目は指先で施されているものと思われる。6層出土。3の残存部に隆起文の施文はないが、口縁部形態より隆起文土器と判断した。口縁部はややつまみだされており、端部はナデ調整により面を有する。内外面ともに、ユビオサエにより調整されており、特に外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土は粗く、ユビオサエの後にナデ調整されないことから粗製の土器といえる。6層出土。4は深鉢であり、器壁は胴部から口縁部にかけて直線的に開く。2・3と比較すると器壁は薄く、口縁端部は面を有する。内外面ともにユビオサエの後にナデ調整される。外面には口縁部と平行な隆起文が1条施される。この隆起文は粘土紐を貼り付けたものではなく、指先で器壁を押さえ、凹凸をつけることで成形されている。そのため隆起文に沿って器壁がくぼんでいる。廃土中出土。

5～8は隆起文土器の胴部である。5は深鉢と考えられる。内外面ともにユビオサエの後、ナデ調整される。外面上部には、横位の隆起文が1条施されている。しかし、大部分が剥離しているため、刻目の有無は不明である。6層出土。6は外面に横位の隆起文が3条施されている。この隆起文は器壁を押さえ、凹凸をつけることで成形される。そのため、粘土紐を貼り付けた隆起文と比較すると高さはない。内面はユビオサエの後、ナデが施されている。3層出土。7は内外面ともにユビオサエの後、ナデ調整される。外面には横位の隆起文が1条貼り付けられており、等間隔に刻目が施されている。2層出土。8の外面はユビオサエの後、丁寧なナデが施されている。その後、5条の隆起文が貼り付けられている。残存部から判断すると、上位2条の隆起文は右下がりの斜め方向に施されている。残りの3条は横位である。隆起文の端は粘土を高く盛り、豆粒状を呈する。このような端部を有する隆起文土器は、第1次調査においても出土している。なお内面はユビオサエの後、丁寧にナデが施される。3層出土。

9は沈線文を有する胴部である。隆起文土器には隆起文と沈線文を組み合わせたものも存在することから、隆起文土器に伴うものと考えられる。沈線文は先端の鋭い棒状工具を用いて施文されており、横位の沈線、斜位の沈線の順に施されている。6層出土。

10は平底の底部であり、底径9.5cmを測る。底面中央はわずかに盛り上がり、厚みをもつ。内外面ともにユビオサエの後、丁寧なナデが施されている。なお、底面も丁寧にナデ調整される。隆起文土器の底部は平底が主体であり、今回出土した他の隆起文土器と胎土や色調も類似することから、隆起文土器の底部と考えられる。6層出土。



第14図 越高遺跡出土土器実測図

第5表 越高遺跡出土土器観察表

No.	分類	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考	出土地点	層位
				口径	底径	器高								
1	隆起文土器	不明	胴部	-	-	-	外：ナデ 内：条痕	隆起文	外：にぶい橙 内：にぶい橙	良好	緻密		A	攪乱層II
2	隆起文土器	鉢	口縁部	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	隆起文	外：橙 内：橙	良好	緻密		B	6層
3	隆起文土器	不明	口縁部	-	-	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	-	外：暗赤灰 内：にぶい橙	不良	やや粗		B	6層
4	隆起文土器	不明	口縁部 ~胴部	-	-	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	隆起文	外：にぶい橙 内：にぶい橙	やや不良	緻密		B	廃土中
5	隆起文土器	不明	胴部	-	-	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	隆起文	外：にぶい赤褐 内：明赤褐・赤黒	良好	緻密		B	6層
6	隆起文土器	不明	胴部	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	隆起文	外：灰黄褐 内：にぶい褐	良好	緻密		B	3層
7	隆起文土器	鉢	胴部	-	-	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	隆起文	外：灰黄褐 内：にぶい黄褐	良好	緻密		B	2層
8	隆起文土器	不明	胴部	-	-	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	隆起文	外：橙 内：灰褐	良好	緻密	第1次調査出土資料に類例あり。	B	3層
9	隆起文土器	不明	胴部	-	-	-	外：ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	沈線文	外：にぶい赤褐 内：灰褐	良好	緻密		B	6層
10	隆起文土器	鉢	底部	-	9.5	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	-	外：にぶい橙 内：にぶい橙	良好	緻密		B	6層
11	隆起文土器	鉢	底部	-	(8.8)	-	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	-	外：黄褐 内：にぶい橙	不良	緻密		B	3層

※ () は復元径。

11は底部から胴部にかけて残存する個体である。復元底径は8.8cmであり、平底を呈する。胴部は器壁が薄く、やや内湾しながら上方へと伸びる。内外面ともにユビオサエの後、ナデ調整されているが、外面は丁寧になでられることからユビオサエの痕跡はほとんど見られない。10と同様の理由から隆起文土器の底部と想定される。3層出土。

時期 A地点出土土器はいずれも細片であり、時期の推定は困難であったが、外面に隆起文が施され、内面は条痕調整された個体や内外面条痕調整の個体を確認している。隆起文土器は一般的に器壁の内外面を丁寧になでるため、条痕調整は縄文的な要素とされる。しかし、第2次調査において出土したA地点の隆起文土器には、内面条痕調整のものが多数存在するため、隆起文土器群に含まれる可能性が高いと言えるだろう。

一方、B地点からはわずかながら隆起文土器が出土したが、縄文土器の出土はなく明確な時期は不明である。しかし隆起文土器の特徴から概ね新石器時代早期の前半代に当たるものと思われる。また、6層出土の2は粘土紐貼り付けにより隆起文が成形されるが、3層出土の6は器壁をつまみ出し、凹凸をつけることで隆起文が成形される。隆起文は粘土紐貼り付けからつまみ出して成形するものへと変遷することから、3層と6層には時期差が想定される。この想定はわずかな出土資料に基づいたものであるため、資料の増加を待ち、再度検討する必要がある。

(2) 石器 (第15・16図、第6表)

A地点では14点の石器が出土した。いずれも谷部調査区からの出土である。層位別にみると、攪乱層I 1点、2層5点、4層4点、表面採集4点であり、すべて黒曜石の剥片であった。

B地点では15点の石器が出土した。層位別にみると、3層1点、4層1点、6層13点であり、図示したもの以外は黒曜石の剥片であった。なお今回掲載した石器はすべてB地点出土のものである。

スクレイパー 1～6はサヌカイト製のスクレイパーである。3を除くとすべて6層廃土中からの出土である。1は縦長の剥片素材を使用し、主要剥離面の周縁に急角度で粗い調整剥離を施し、刃部を形成する。刃部は鋸歯状を呈する。下半部欠損。2は幅広の横長剥片を素材とし、端部を中心に両面から細かい剥離を加える。主要剥離面の打面側にも剥離が認められる。3はやや厚めの幅広剥片を素材とし、周縁を粗く調整した後、背面の底辺から左側辺にかけて調整し、刃部を形成する。4は長めの不定形剥片を素材とし、主要剥離面の右側辺に粗い加工を施し、刃部を形成する。刃部は鋸歯状を呈する。5は厚く幅広の縦長剥片を素材とする。主要剥離面側を調整し、台形状に整える。背面側から全縁に刃部を形成する。6はやや厚めの縦長剥片を用い、主要剥離面および背面を調整加工し、周縁部に刃部を形成する。背面頭部側にも連続する調整加工を施す。

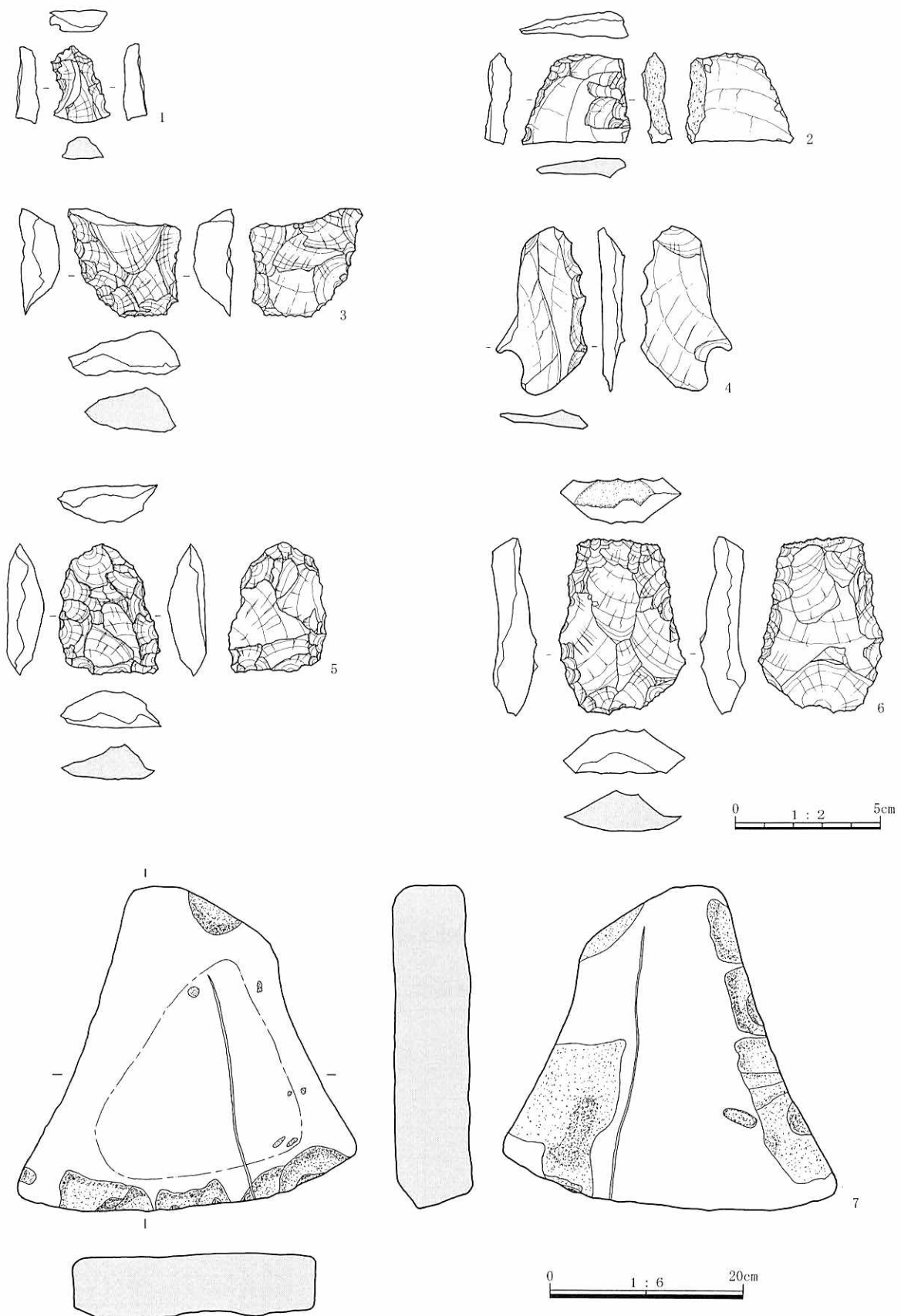
石皿 7は砂岩製の石皿である。大型品であり、重さ12.2kgを計る。使用面は研磨されており、非常に平滑である。3層出土。

磨石 8・9は磨石である。8は砂岩製である。bおよびd面は研磨された痕跡が確認できる。下部を欠損する。6層出土。9は花崗岩製である。遺跡周辺を構成する岩石は対州層群と呼ばれる頁岩であるため、搬入品と考えられる。aからeのいずれの面にも研磨痕が確認できる。また、c面には数箇所の敲打痕がみられるため、敲石の役割も果たしていたものと思われる。4層出土。

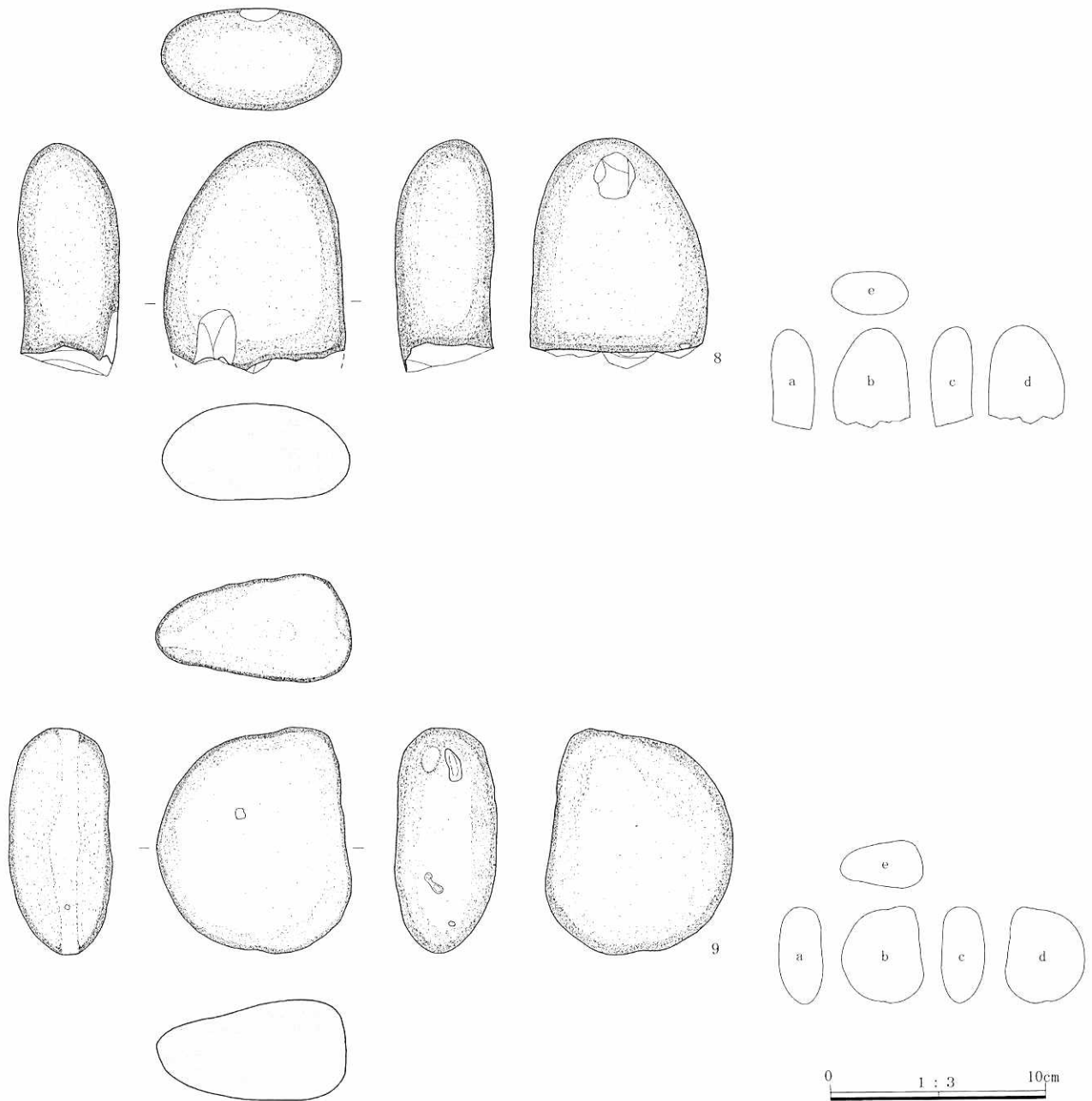
(3) 炭化物

炭化物はB地点でのみ確認されており、23点出土した。層位別には6層15点、層位不明が8点で

ある。なお、6層出土の炭化物を対象に放射性炭素年代測定法（AMS法）を用いて分析を行った。分析結果は第四章にて述べる。（前田・山元）



第15図 越高遺跡出土石器実測図（1）



第 16 図 越高遺跡出土石器実測図 (2)

第 6 表 越高遺跡出土石器観察表

No.	器種	石材	法量				備考	出土地点	層位
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
1	スクレイパー	サヌカイト	2.7	2.0	0.7	3.8	上半部を欠損。	B	6層廃土中
2	スクレイパー	サヌカイト	3.2	3.8	0.7	9.7		B	6層廃土中
3	スクレイパー	サヌカイト	5.7	3.1	0.6	12.1		B	6層
4	スクレイパー	サヌカイト	3.7	3.8	1.4	17.0		B	6層廃土中
5	スクレイパー	サヌカイト	4.5	3.6	1.0	18.8		B	6層廃土中
6	スクレイパー	サヌカイト	6.1	4.3	1.4	37.5		B	6層廃土中
7	石皿	砂岩	33.3	33.0	6.9	12200.0		B	3層
8	磨石	砂岩	10.7	8.2	4.4	594.8	下半部を欠損。	B	6層
9	磨石	花崗岩	10.5	8.6	4.6	652.2		B	4層

5. 第2次調査出土土器の再検討

(1) 出土土器の概要

第2次調査は1978年に越高遺跡A地点を対象として実施されており、多数の土器が出土している(坂田1979)。この調査の注目すべき点は、朝鮮半島系の隆起文土器と塞ノ神式や轟式、曾畑式といった縄文土器が共伴して出土した点である。この成果に基づき、隆起文土器と縄文土器の併行関係が明示され、今日でも日韓の土器交流を考える際の重要な資料となっている。しかしながら、調査から30年以上が経過し、日韓の土器研究も大きく進展した現在、再検討の余地があると考えた。そこで、第2次調査で出土した特徴的な遺物について再度資料化し検討を行った。なお、第2次調査で出土した土器は現在、対馬市教育委員会に保管されている。今回は教育委員会のご協力により再整理が可能となった。また、検討に際しては、河仁秀・水ノ江和同の両氏に多くのご教示を賜った。

(2) 出土土器の検討(第17・18図、第7表)

第2次調査の報告で図化された土器は175点におよぶが、今回は残存状態の良い個体および隆起文土器と縄文土器との併行関係を明示する際に根拠となった個体を選び、図示した。

第Ⅱ層 1・2は隆起文土器の胴部である。1は胴部が張り、口縁部にかけて外反する。外面には横位の隆起文が2条施された後、刻目をつけられる。その後、刻目を起点に斜位の沈線が施文される。外面には赤色顔料が塗布されている。調整や胎土より、朝鮮半島から直接搬入されたものと考えられる。2の外面には上位に鋸歯状を呈する隆起文が、下位には多条の横位隆起文が施されている。その後、刺突により刻目をつけられる。胎土や色調は1と類似する。3は、外面に連弧文が施文されていることから、西唐津式と指摘されてきたもの(古澤2013)であるが、隆起文土器に伴う沈線文土器の可能性もある。内面は横位の条痕により調整されている。

第Ⅲ層 4は、従来曾畑式と認識されていたものである。口縁部は垂直にのび、胴部にかけて丸みを帯びる。外面には浅い沈線により斜格子文が施されており、その下部には刺突文が施文される。内面は横位の条痕により調整される。今回は隆起文土器に伴う沈線文土器と判断した。

5～7は、従来轟B式と指摘されていた個体である。5は、体部から口縁部にかけてやや内湾する深鉢と思われる。外面に横位の隆帯文が3条施される。内面はナデ調整である。6は残存部上半に横位の細い隆帯文が施され、その後に刻目が刻まれる。内面は条痕調整と報告されているが、その痕跡は明瞭でない。7は外面に横位の隆帯文が5条施され、内面は横位の条痕調整である。これら3点の土器は、轟B式とは隆帯の形態が異なるだけでなく、調整の面でも条痕調整ではなくナデ調整のものが存在していることから、隆起文土器に含まれる可能性がある。

第Ⅳ層 8は隆起文土器の口縁部であり、外面には横位の隆起文が1条施される。隆起文には刻目が施され、下位に縦位の沈線が施文されている。9は隆起文土器に伴う沈線文土器であり、外面には斜格子の沈線が施され、その下位には横位の沈線が施文されている。内面には薄く条痕の痕跡が残る。なお、口唇部には浅い刻目が施されている。10は隆起文土器であり、外面に隆起文が2条確認できる。隆起文は刻目を施すものと施さないものとが併用され、特徴的な個体と言える。

11・12は従来塞ノ神式とされていたものである。今回再検討した結果、塞ノ神式とするには根拠に乏しい資料であることが判明した。しかし、型式は不明である。小片であるため、傾きについては検討の余地があるが、かなり浅身の器形に復元されるものと思われる。

第V層 第V層の土器は13のみ掲載した。13は口縁部がやや外反し、口縁部の下位に横位の隆起文が施される。隆起文には刻目をつけられ、刻目を起点として縦位の沈線が施文されている。

第VI層 第VI層の隆起文土器には、口縁部に一定の空間をあけ、横位の隆起文が施された後、その下部に縦位あるいは斜位格子の沈線が施文されるという共通の特徴がみられる。これらは隆起文土器の文様分類のd文様群に属するものと思われ、隆起文土器のなかでも後半段階のものと評価される(田中1997)。以下、詳細について述べる。

14は外面の口縁下位に2条の隆起文が施される。隆起文には上下同位置に刻目が刻まれる。その下部には縦位の沈線が施文される。内面には横位の条痕調整が明瞭に残る。15の口縁部は直線的に開く。外面に横位の隆起文が施された後、刻目をつけられる。隆起文の下部には縦位の浅い沈線が施文されている。16は口縁部がつまみ出されて外反する。外面には口縁部と平行する隆起文が1条施されており、刻目が刻まれる。その後、縦位の沈線文、斜位の沈線文の順に施文される。内面は目の細かい条痕調整が斜位と横位の交互に行われている。17は口縁部が直線的に開く。外面に施された隆起文は断面が三角形を呈しており、他と比較して高く隆起する。隆起文には、指で刻目が施される。その下位には縦位の隆起線文が施されている。18は外面に低い隆起文を横位にめぐらせ、刻目が施される。その下位には沈線が施文されており、斜位の沈線で区画を設けた後、縦位の沈線が充填される。19は口縁端部が外側へ屈曲する。外面に隆起文が施され、刻目が刻まれる。その下位には縦位の沈線文が施されているが、規則性はみられない。

20～22は、隆起文土器に伴う沈線文土器と考えられる。20は口径が13.8cmと小さく、碗形に復元される。外面には斜格子文が施された後、横位の沈線が2条施文される。22は胴部外面に沈線文が施文される。初めにX状の沈線で区画された後、上部には縦位、横位の順に沈線が施され、格子目状の文様を呈する。一方、下部は右から左への沈線、左から右への沈線が順に施され、斜格子文で充填されている。内面は目のつまった条痕により調整される。22は平底の底部であり、底径5.2cmとかなり小型である。外面には乱れた斜格子の沈線が施され、内面にはわずかに条痕調整の痕跡がみられる。

23は、外面に斜位の押引文が施されており、屈曲部には隆帯が貼り付けられる。隆帯には刻目が施されている。熊本県の轟貝塚出土土器(宮本1990)に類例があるが、隆起文土器群の余地を残すとの指摘も得ている(河仁秀氏による)。

(3) 小結

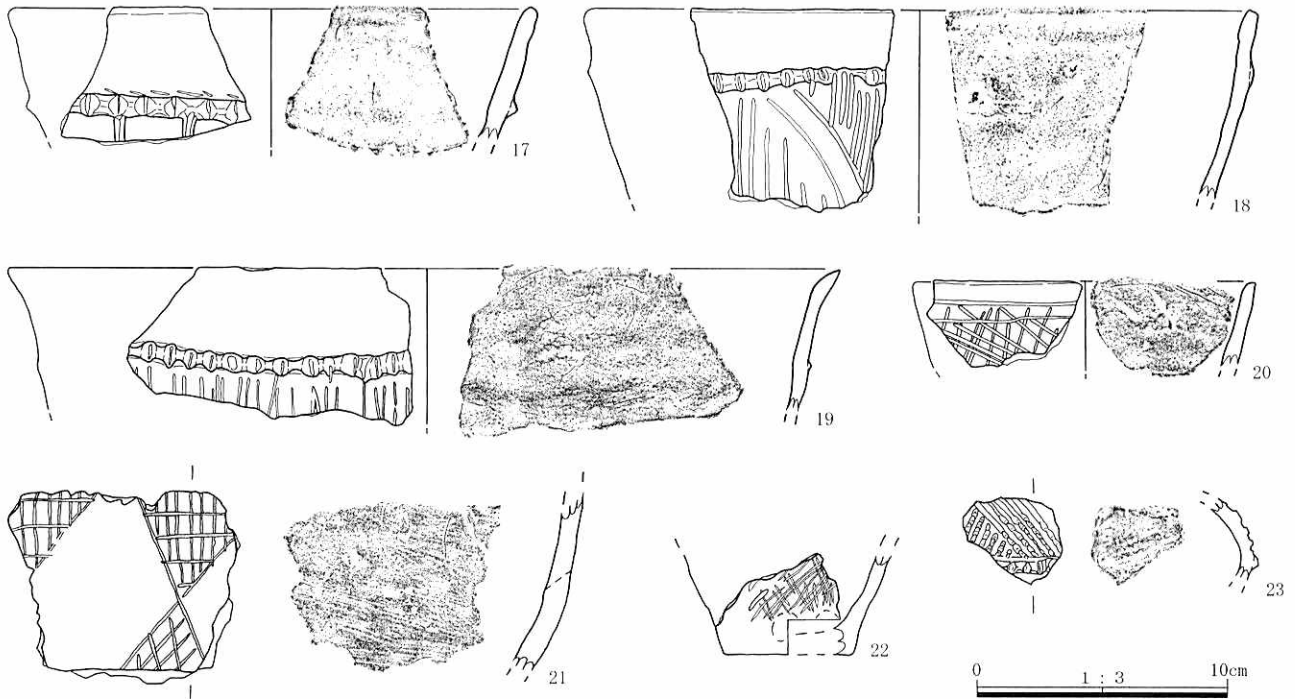
今回の検討より、従来の見解を一部見直す必要が生じた。これまで縄文土器と認識されてきた個体は、積極的に縄文土器と判断するには根拠に乏しく、隆起文土器の範疇に含まれてもおかしくないものと判明した。一方で、こうした個体は対馬への伝播過程で変容した縄文土器である可能性も考えられる。今後は、縄文土器と隆起文土器を峻別するための明確な基準づくりが必要である。

また、隆起文土器についても新たな見解を得た。1・2は胎土や調整より、朝鮮半島から搬入された可能性が高いことが判明した。また、B地点資料と比較すると、A地点資料には内面を中心に縄文的要素である条痕調整の施された個体が多数存在する。そのため、A地点資料は縄文土器的要素が取り入れられ、製作されたものと考えられると同時に、A地点はB地点より新しい時期に位置付けられるものと判断した。

今回は再検討により得られた知見を部分的に述べたに過ぎない。対馬における縄文時代早期から前期における縄文土器資料は少ないため、今後資料の増加を待ち再度検討する必要がある。(山元)



第17図 第2次調査出土土器実測図(1)



第18図 第2次調査出土土器実測図(2)

第7表 第2次調査出土土器観察表

No.	分類	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	文様	色調	胎土	焼成	備考	層位
				口径	底径	器高							
1	隆起文土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文 沈線文	外: 淡黄 内: 淡黄	緻密	良好	朝鮮半島からの搬入品と考えられる。外面に赤色顔料塗布。	第II層
2	隆起文土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文	外: にぶい黄 内: 灰黄	緻密	良好	朝鮮半島からの搬入品と考えられる。	第II層
3	西唐津式土器	不明	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	沈線文	外: オリーブ褐 内: 黄褐	緻密	良好	従来曾畑式と認識される。	第II層
4	隆起文土器	鉢	口縁部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	沈線文 刺突文	外: 黒褐 内: 暗褐	緻密	良好	従来曾畑式と認識される。	第III層
5	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	(17.4)	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文	外: 明黄褐 内: 黄橙	緻密	良好	従来轟B式土器と認識される。	第III層
6	隆起文土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文	外: 橙 内: にぶい黄橙	緻密	良好	従来轟B式土器と認識される。	第III層
7	隆起文土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	隆起文	外: にぶい赤褐 内: にぶい赤褐	緻密	良好	従来轟B式土器と認識される。	第III層
8	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文 沈線文	外: 明赤褐 内: 明黄褐	緻密	良好		第IV層
9	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	沈線文	外: 赤褐 内: 明赤褐	緻密	良好	口唇部に刻目を有する。	第IV層
10	隆起文土器	不明	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	隆起文	外: 橙 内: 橙	緻密	良好		第IV層
11	不明	不明	口縁部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	—	外: 明黄褐 内: 明黄褐	緻密	良好	従来塞ノ神式土器と認識される。	第IV層
12	不明	不明	口縁部	—	—	—	外: ユビオサエ・ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	—	外: 暗赤褐 内: 黒褐	緻密	良好	従来塞ノ神式土器と認識される。	第IV層
13	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	隆起文 沈線文	外: 明赤褐 内: 橙	緻密	良好		第V層
14	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	隆起文 沈線文	外: 橙 内: 橙	緻密	良好		第VI層
15	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	(23.0)	—	—	外: ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	隆起文 沈線文	外: 褐 内: 赤褐	緻密	良好		第VI層
16	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	(28.0)	—	—	外: ユビオサエ・ナデ 内: 条痕	隆起文 沈線文	外: 明褐 内: 橙	緻密	良好		第VI層
17	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	(21.0)	—	—	外: ナデ 内: ナデ	隆起文	外: 橙 内: 橙	緻密	良好		第VI層
18	隆起文土器	鉢	口縁部 ~胴部	(27.0)	—	—	外: ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	隆起文 沈線文	外: にぶい褐 内: 褐	緻密	良好		第VI層
19	隆起文土器	鉢	口縁部	(33.0)	—	—	外: ユビオサエ・ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	隆起文 沈線文	外: 赤褐 内: 明赤褐	緻密	良好		第VI層
20	隆起文土器	碗	口縁部	(13.8)	—	—	外: ナデ 内: ユビオサエ・ナデ	沈線文	外: 暗褐 内: 明褐	緻密	良好		第VI層
21	隆起文土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: 条痕	沈線文	外: にぶい褐 内: にぶい黄褐	緻密	良好		第VI層
22	隆起文土器	鉢	底部	—	(5.2)	—	外: ユビオサエ・ナデ 内: ユビオサエ・ナデ・条痕	沈線文	外: 赤黒 内: 暗赤	緻密	良好		第VI層
23	轟B式土器	鉢	胴部	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	押引文 隆起文	外: にぶい褐 内: 橙	緻密	良好		第VI層

※ () は復元径。